
エデンの死角

堀 ゆう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エデンの死角

【Nコード】

N6153X

【作者名】

堀 ゆう

【あらすじ】

各地で当たり前のように起きる事件。そのごく一部にはErrorsと呼ばれるモノが関わっている世界。五年間を失った男、上池常夏。保護と称された依頼には常にErrorsが関わっている。そんな奇妙な事件をどのように決着していくのか———!?

プロローグ

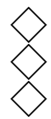
二種類の生き方がある。

自然に委ねていく生き方と神に委ねていく生き方。

どちらに従うべきはわからない。

誰かが導いてくれるわけでもない。

ただ、そうして人生は過ぎ去るだけ――――



今日も女は訪ねてきた。

「こんばんは。だんだん寒くなってきましたが体調の方は大丈夫ですか、ジヨウカ」

秋も終わり。季節の変わり目。

日中はそこまで寒くないと思っていたが、やはり夜には急激に気温が低下していた。

時刻は七時過ぎ。

「実は、ここに来る途中に聞いたのですが、どうやら最近変わった風邪が流行っているらしいです。なんでも、普通の風邪と違い高い熱が出て体中の関節が痛むといった症状が出るようで……」

と、ビニール袋を渡される。中を確認すると様々な薬が入っているが先ほどの会話で必要と思われる風邪薬だけが見当たらない。

……まあ、これはいつものことだ。

俺がそんな感傷に浸っていた隙に女は早々と靴を履き捨て脱衣所へ向かっていく。そんな、女の後姿を睨みながら覗いてやろうか思ったが、キツと睨まれそそくさと退散。

家には狭いながらも露天風呂がある。家の横にある池に写る月を見ながら入れるベストスポット。その味をしめたのか、あの女はここを銭湯だと勘違いしたかのように毎日通いつめている。

居間へと続く廊下窓から露天風呂が見える。湯気のせいでハッキリとは見えないが女の姿が現れる。

いや、そこはタオルを巻かずに素肌を見せやがれ。

「ジョウカ。あなたは就活という言葉を知らないのですか。こう何日もダラダラして……。いくら学歴が高校中退だからと言って、就職口がないわけではないのですよ。それなのに毎日のほほんと過ごして。あなたはもう社会人なのだとわかっていますか？」

風呂上り開口一番。

「わかってないのはおまえだよ、アンリ。仕事を探したり、働くのは生活するうえで金が必要なヤツがする事だろう。俺は金が無いわけでもないし、生活するうえで足りないわけでもない。だいたいお前も似たようなものじゃないか」

「…むう。確かにお金は有り余るほど持っているようですが、それとこれは関係ありません。私が言いたいのは社会的な、一般的な常識を言っているのです。——後、言っておきますが私はちゃんと仕事をしてますよ、ジョウカと違って」

最近になって気づいたが、二年間でかなり成長してやがる、とあの二つの盛り上がった山を見て思う。ふふんっ、と胸を張って言いやがるアンリエール嬢。

どうやらこいつは俺にまっとうに生きて欲しいようだ。——まあ、なんていうか二年前からずっと。

アンリはベッドの上に腰を下ろした。

俺は枕側の位置に腰を下ろすと、そのまま体を横にする。アンリは胸元まで伸びた髪を拭いているようだ。

その、アンリの横顔を、ボウと見つめる。

アンリ・シャリエールという少女に出会ったのは二年前。

近年、様々な文化の欧米化が進む日本。ジャンクフードや高カロリーの食生活による激太りで命の危険に晒された者や何をはき違えたのかこれは流行るだろうと海外から次々取り入れた挙句暴走し最後は消滅するという現代の日本で、日本の文化、いや日本が好きで堪りませんという日本人より日本人らしい大和撫子風外人。――希少種だ。

外国人にしては明らかに東洋風な顔立ち。おそらく自身とさほど変わらぬ背。ケータイも持たず、というより使えない。流暢な日本語。髪は黒髪だが、毛先などが白く見えるせいか鈍色に見える。

はっきり言って外人というより一つ前時代の骨董品のような日本人に見えてしまう。ただ、目の色だけが日本人離れしていてそう見えそうで見えない。本人はいたく、その事を気にしているせいか眼鏡をかけて隠そうと必死。

まあ、それが変に似合ってしまったってキツイ印象を受けるのだが。しかし、これはこれで流行りの服を着飾ったらそこのモデルなんかよりいいのではないだろうか――

「先ほどの続きですが、ここの神社を再開するのはどうですか。それなら、壊れている物を直して残っている物を手入れする位で手間は掛かりませんし、なによりご先祖様が残してくれた物を活用しない手はないでしょう？」

「ああ、それは無理だ。あそこは何代も前に神社として機能してない」

「なら、どうして鳥居や賽銭箱など残っているのです。使わないのなら邪魔なだけで処分するのではないのですか。でも、残っているというのはそれこそご先祖様の方々がいつか再興してほしいと考えたからなのでは？」

「んなことは知らん。……仮にだ、この神社再興して人が寄りつくと思うか？——知らないと思うが市内じゃ有名な心霊スポットで広まってるぞ、ここ」

「神秘的な趣があるのは好都合ではないですか。人が勝手に集まってくるなら後は綺麗に掃除をすれば立派な神社です。————だいたい、これだけ立派な神社だというのに放って置くなど日本人としての常識が解りかねます」

嫌の方向に進む話に眉をひそめる。

心霊スポット、イコール、神秘的とアンリの中では変換されたもよう。おまえの常識が解りかねえ。

そもそも解りかねるって、放って置くことに何か問題があるのか？別に法に触れるような事は一切ないはず。

まあ、アンリはそれよりも俺が何も職に就いていない事を気にしているようだが。それにしても違法でもなんでもない。たんに社会的にアウトローな生活を送っているだけ。その事に不満もないし、むしろこれはこれで満足できる生活だと感じてる。

金銭面の問題に関しても個人が持っているのかと思える遺産がある。ほら、今の俺の生活に問題など無いはずだ。

……だというのにアンリはそんな俺の在り方を心配する。いや、ほんと、いつになったら無駄だと気が付くのかね。



上池常夏^{かみいけじょうか}とは二年前に出会ってからの知り合いだ。

観光としてこの地にきた私は祖父からよく聞かされていた話を頼りに各所を見て回っていた。

そんな折、ここ、大暮市に立ち寄った時町の住人から奇妙な話を聞いた。

——この町の山にはすされた神社がある。

日本で見るものすべてが新鮮に感じていた私にとってその話は興味が湧くのと、歴史的価値のあるものではないのかと考えるには十分すぎるもので、すぐに足を運んだ。その時に神社の住人であるジョウカと出会った。

神社の横のジョウカの住まいである屋敷から出てきたジョウカを見た時、住職ないしその息子か、あるいは関係者だと思った。なにしろ作務衣を着流していたからだ。

しかし、ここで違和感を感じてしまった。——髪が白いのだ。染めたような違和感ではないし、この風景に合っていないというわけでもない。

近づいて見れば理由は簡単。

その髪の男は、少年と言っても差支えない顔なのだ。

そして、それがジョウカとの出会い。

以来、この町に滞在することにした私はジョウカの数少ない話し相手、友人となった。

神社は特に歴史的価値があるものでも、どこぞの宗派に属している訳でもなかった。そのためかジョウカは、どうでもいい、といった感じで神社の管理はずさん。たまに家の周りしか掃除をしないのだ。

しかし、そんな言動とは裏腹に容姿は出来過ぎなくらい神社関係の事に合っている。

一度だけだが、着物を纏った姿を見たことがある。それはジョウカの撫で肩によく似合っていて、瓦礫が散乱するこの神社が神秘的な場所にさえ見えたほどだ。

しかし、それはあくまで本人が必要と感じたとき以外は着ることはなく、二年見てきたが未だにその一度だけだ。そのため普段着は作業衣を着用し、文字通り山奥で余生を過ごす世捨て人な格好をしている。ただ、だからといって髪はボサボサに伸ばしたり、ひげを生やしたりはしていない。背丈は一七〇位で私より少し大きい。

この町の住人は良くも悪くもジョウカの事を知っている。あまり良くない話しか聞いたことがない。——とにかく髪が目立つのだ。

それがひどく嫌だと感じている。ジョウカは気にしていないようだ

が私にはそれがとても受け入れがたい。私は彼に恩を感じている。だからと言って二年間もこの地に留まる理由にはならないが。それでも、ジョウカのために何かしたいと感じる。

私らには感じることも、見ることも出来ない何かを静かに見続ける瞳。自分が何より魅了されたジョウカの目が自分にとって、上池常夏という人物のすべてだ。

あの日。

ジョウカと出会った瞬間から――

「さっきの流行ってる風邪の事だが」

「え？――は、はい。ここ最近から前兆のようなものがあつたらしいのですが……」

「……？ どうした」

「いえ、ただ今頃になってその噂に違和感というか疑問を感じたので……」

「噂の話にはどこか綻びがあってもよくあることだろう。そんなの当たり前前事を考えるようなものだ」

だいたい、アンリはバカ正直過ぎ。もっと楽に生きろ。

「いえ、話の内容じゃなく、その話そのものに違和感があると言いますか…」

なにそれ意味わかんねえ。だいたい純正の外人が日本語で言葉遊びなんかするな。

「なにそのインスピレーションに頼った言葉。ここは日本ですよ」

「……む、何を言いますか！言っておきますが私の国ではそういった微妙な表現は使いません。むしろ、日本語こそ中途半端な言葉が多いではないですかっ！」

ガ、と元気よく、礼儀正しくかつ叫ぶアンリ。中身外人のくせに流れるような日本語を使いやがる。

「…たとえば？」

「『ひらひら』とか『ゆらゆら』とかです!」

：確かに海外から見れば日本語は外来語も混ざって難解だろうが、擬音の言葉に関しては表現が豊かだと思ってほしい所だ。だって、それこそアンの言いところの日本の美徳ってやつに他ならないと思う。

「……それ、どっちもほぼ意味同じだろ」

「…えっ? そ、そうなのですか! ? 私 は て つ き り …… 。 ―――
というか話が逸れてますっ! えーと、私が言いたいのは……」

はあ、とため息を吐き頭を抱えるアンリ。出会ってからずっと、この芸風である。ブツブツと呪詛めいた独り言を呟いているが『これだから日本は嫌い……』、――聞こえてしまった。

大雑把に言うと、基本的には日本の事が好きなのだが、先ほどのような事やちよつと躓けば暗黒面が出てしまう典型的なお嬢様気質の方である。ははは、マジ扱い困る。

「それより話の続き。お願いします、アンリエール嬢」

ブスッと、不機嫌を通り越して、親の仇を見るように殺意の目覚め

た波動を出しながらこちらを睨む。

威圧感、当比社二倍！

「……簡潔に話します。先ほど言った違和感というのは話の出所が分からないということです」

？出所が分からないって、噂話はそんなものじゃないのか？

むう、と頭をひねるアンリ。

「いえ、これも違いますね。半紙の出所が分からないというのは、私自身がその噂を聞いた覚えがない、と言ったところでしょうか」

それはまた、別の意味でややこしい話だ。

それは詰まるところ、アンリは誰かからその風邪が流行っているという話を誰かから聞いたのではなく、その風邪が流行っているという情報がいつの間にか記憶に入っていたという事だ。

「一応聞くがそれって今日聞いた記憶として入ってんの？」

「そのように記憶します」

「誰かから聞いたのを忘れてるだけって可能性は？」

「ありえないです。第一に、この噂に疑問を持った原因が今日はジヨウカ以外に人とは会っていない事からきているので」

記憶の操作か或いは……。

これはまた面倒事を持ち込みやがりましたね、君は。

俺は物心つく頃からそういった出来事に遭遇しやすいと思っている。

奇々怪々。

そこらに蔓延る都市伝説から伝承に伝わる魑魅魍魎の類まで多種多様である。

そのうちコズミックなモノまで出てくるのではないのかと、内心ドギマギしている。

マワリさん曰く、それは領分が違うから大丈夫、とか言っていたがあの信用ゼロのスマイルで答えられても全くフォローになっていない。いや、あの人にフォローなんてされる方が裏があるのではないのかと余計に心配だ。

「話はよくわかった。じゃあ、アンリ。お前は今日からここに泊まれ。寝るときはこのベッドを使っても構わないから」

「？ 今日泊めてもらおうと思ってましたが、今日からとは明日明後日もここに泊まっていという事ですか？」

「泊まっていではなく、泊まれ、だ。——一応言っておくが、これは決定事項だから。文句はいくらでも聞いてやるが、内容の変更は一切受け付けない」

「…それは別に構わないですけど——」

「後、この家から一歩も出るな」

「…ばっ——！？ なんですか、それ！ 意味が解りません！！」

ポフポフと布団を叩くアンリ。ははは、お前が面倒事を持ち込もうとする方が意味わかんねえ。

「悪いがお前をここに監禁する事、これ、もう決まったことだ。お前も承諾したし」

「くっ、勝手に決めないでください！というか私をここに出さない理由の説明を要求しますっ！！」

「え？だって、このままだと面倒事に巻き込まれそうだし」

「それとこれと、何が私に関係しているのですかっ！？」

理不尽極まりないところらを睨むアンリ。ずれた眼鏡から紫の瞳が伺える。その眼は雅な雰囲気と惑わす印象があるが、邪気を感じない。だから、こいつはそういった類を引き寄せやすいのだ。アンリがこの家に来るようになってから遭遇、あるいは発生率が右肩上がりなのはその証拠である。

それにしても、勝手に入っている記憶、か…。

正直、興味はある。しかし、今さら脳の神秘について話をされてもつまらない。

なんで今は、手頃な所で楽しんでおこう。

「で、さっきの噂の内容だけど」

今更なんですか、とこちらを睨むアンリに向けて、

「おまえ風邪が流行ってるっていうが、症状から言ってインフルエ
ンザじゃね？」

今更ダメだしを言ってみる。

プロローグ（後書き）

この作品は誤って削除してしまった作品を再投稿したものです。前回、掲載していた時と変更したところはありますが、基本は同じです。

十月も過ぎ、記録的猛暑だった二か月前が少し振り分ければこの肌寒い気温もちょうど良くなるのではないのかと思う今日この頃。

時刻は朝の八時前。

テレビを見ている。

内容は、最後の締めなのか天気予報が流れている。

『——続きまして、大暮市方面は今日一日晴れ模様が続き、気温も高く過ごしやすい一日になるでしょう
最後に全国のお天気を——』

テレビから外に視線を移す。

視線の先には灰色の風景をバックにした風景が一つ。

……あのお天気キャスターはそろそろ降板の時期なのだろうか。確かこの朝のニュースに出るようになったのが二年前だったはず。出た当初は整った容姿に初々しさというのか若さを武器に売り出し人氣を博していたが、その武器は徐々に陰りが見え始めていた。そも

そも若さを武器にしている時点でいつかは衰えるのは分かっていたはずだ……。

ただ、降板するということならそれはそれで惜しい気もする。あの娘を見るのは、それはそれで楽しみの一つだったんだが。いや、無くなるものへ感情が湧き出たところで結局俺は――

「――…んっ、……うん」

おもむろに後ろから手が伸びてきた。手は何かを探しているように手探りに俺の頭と顔をベタベタと触ってくる。そして、俺を荒らすだけ荒らした手は力尽き、背後から、何だ、ジョウカですか、と言。

その後、規則正しい寝息が聞こえた。

背後の人物に顔向け、寝顔を見してみる。

「……よだれがひどいぞ、おい」

ため息を一つ。

今日の天気は俺の気持ちを表すようにとてもイイ天気でお天道様にありがとうの気持ちでいっぱいになりそうだ。だから、そんな神様にお礼がしたいからちよっと顔を出すくらいして欲しいと思う。

———やばい、すげえ憂鬱だ。

今日はもう、何もしたくない。今日は寒いから家から出たくない。もうすぐ冬だから食い溜めして冬眠してしまいたい。物置にはこの冬を越すには十分な食料がある。インスタントいや、冬どころか一年は持たせてみせます。

だから、さっきから鳴り響く電話には出ないつもりだ。

じりり、じりり、と一昔の音を家中に鳴り響くコール。
早く、早く、と催促するように鳴り響くコール。

「……今は出れませんよー。出て欲しいなら春になってからでお願いしまーす」

そんな抵抗もむなく———気づいてから数えたコールは三十回を超えた。なかなかしぶとい。電話の主は余程の暇人なのか、或いはこの住人がなかなか電話に出ないことを知っているのか。

「……だから、出ませんって言ってるのに」

コール数………もはや数えるのが面倒な数字になった。それでも催

促し続けるコール音。

電話の主はこの住人の事を知っている人物なのは間違いない。…
これは出ないと後々面倒だ。仕方がないと思い、立ち上がる。

未だに鳴り響く受話器の前。

何とも言えないあの憂鬱の気分を台無しにした犯人に悪態を吐きながら電話を取る。



家である神社から徒歩で二十分。

町中の商店街の抜けた先にある小高い坂。

この坂の向こうの森には楽園がある———

登り終えた先に世界から逸脱した空間、光景が広がっている。崩れ

た建物、辺りに転がる瓦礫には草や花が生い茂り、まるで戦争後に人の手が加わらず、何年も放置された自然だけの風景。そんなイメージがペロンと綺麗にはまる。町の風景と見比べれば、ここだけがぽっかり置いてけぼりをくらったようにさえ思える。

ここは元病院跡地。

二十年近く前、老朽化という事で新たに病院を立て直そうと計画が進められたらしい。当初は古い病院を取り壊し、そこに建てる予定だった。しかし、この土地の地盤の問題が発覚した翌年、別プランに変更となる。取り壊し作業中であつた元病院は、半分以上取り壊した所で中断となり、新たな場所に建てれる病院へ作業が優先的に行われた。

中断された取り壊しだが、本来は新しく病院が建てられた後に再開される予定ではあつたが、予算の都合なのか未だに再開される目途は立っていない。付近の住人から苦情が殺到したし、一度は再開されるような話は出たが、結局役人たちはそこをそのまま放置した。結果、苦情は何年も続き、毎年のように問題として挙げられた。

が、十年前。

ある人物がこの土地を買い取り、そのまま廃墟と化した病院跡地に住み着いてしまったのだ。

「―――、げ」

東棟。

そこだけが唯一残った建物として機能している。しかし、機能しているとは言っても外見は見るも無残な廃墟だ。

その二階までしか原型の無い病院の付近を掃除している男を発見。ローブを羽織っているのが、ヒョロとした体格だと判断できる。今一番会いたいけど、会いたくない人物である。

無意識に横っ飛びをし、道の端にある草むらにてスニーキング開始。

新たに人を雇ったのだろうか。前に来たとき見たことのない美人ちゃん発見、おーば。：しかし、ここに普通の一般人がここに居るなんて何かあったのか？まあ、どうせなら美男美女同士どっか出かけてくれ——ねえか、やっぱ。

箒を持っていたお兄さんは近くのお姉さんに何やら指示を出す。どんな指示をされたのか。こっちにやって来たおっとり系のお姉さんは何も知らずに俺を発見。悲鳴よろしく口を開けて箒男の近くへ涙目で走っていく。

さすがマワリさん。やってくれますよ。

もそもそと草むらから出る。

「はい。こんにちは。最近、顔も出さないから野たれ死んだと思っ

ていました」

俺としてもこのまま死んだ事になってた方がよかったですよ。

「——おっと、そうでした。今日はもうやることは無いので帰ってもいいですよ」

俺とマワリさんを交互に見ながら困惑を隠しきれない美人ちゃん。そんなことお構いなしに帰らせようとするマワリさん。

マワリさんに挨拶をして早々と帰る美人の人。……あつ。

しまった。

今この場に残ったのは俺と箒を持った変人だけだ。

「さて、質問が何点ありますがよろしいですか、屑」

マワリさんはいつものように蔑みながら言い捨てる。この、聖職者に見える格好をしたイケメンは遠野周^{とおのマワリ}。この十年近くお世話なったり、なられたりした性悪生物。脳内ではトオマワリさん、と呼び名に補正が掛かる。

「おや、あまりにも長く穴倉に引きこもったせいで言葉も忘れましたか」

本気でゴミを見るような顔はやめてください。すごく不愉快だ。

「お久しぶり。隠れるのは秘めたる特技の一つのつもりだったんですけど、一瞬で見つかりましたか。いや、朝から目ざといねマワリさん」

「常夏^{としなつ}くん。キミ、気づいていないのですか。作務衣着た白髪の青年なんて、嫌でも目に付いてしまいます。……まったく。やるならもっと人目のある所で不審な行動をとってください。キミの場合、職務質問一つで留置場行き決定なんですから」

「冗談。マワリさんこそ精神鑑定でも受けたらお仲間のところへ行けますよ」

「ふふっ、それは大丈夫。私はあなたの仲介者ですよ。あの程度の探り合い、とうの昔に克服しました。ですから安心して豚箱に入ってください」

マワリさんは相変わらずのようだ。見た目イケメン、中身最悪。

近所付き合いは良好なうえに月一で社会への奉仕活動をしているため市内の役人や警察からも信頼されている。何しろ苦情を言っていた住人達をまとも上げた人物だ。おまけにあの見た目で聖職者のような偽善っぷり。多分、あの人を悪人だと疑う人間はこの町に俺しかないと思う。なんて言ったってこの人は前科持ち。しかも詐欺の。そんな人間は社会復帰したとしても社会の隅で前科があることを隠して生きていくものだ。

しかし、この人は自らその事を町の人に喋ったのだ。それもまだこの土地に来たばかりの頃に。住人達は困惑。一時的だったが苦情が五割増し。近所の住人からはハブ。常人であるなら耐えられないほど嫌がらせを受けていたが、それでもマワリさんはこの土地に留まり、聖職者の真似ごとをした。それを十年間、変えることなく人々に恩を売りまくった。

結果、今現在の信頼と親愛を勝ち取った。

たった十年でこれ以上、底がない状態からここまで上がってきたカリスマの塊のような人間だが、本人はいたく不満なようだ。何しろマワリさんの思考は常人の斜め上にある。おそらく、市民を味方にこの町を掌握しようと策を講じているに違いない。

「――キミね。その、人を食ったような顔やめなさい。刑務所で四人に笑われているようで、すごく不愉快です」

「何を言ってるんですか。マワリさんこそ取り繕った善人みたいな顔してますよ」

「それはそう見せているのだから当たり前です。これ、いろいろと便利なんですよ」

柔らかに笑うマワリさん。完璧すぎて胡散くせー。

「ところで今日はどのような用件があつてここ来たのですか？」

「どのようかって、俺が来た以上は一つしかないでしょう。マワリさんが仲介した依頼の件です。依頼されたのはいいですけど、ほとんど情報を超越さなかったんで。仲介者であるマワリさんなら何か知ってるのではないのではと来た次第であります」

「…キミは仲介屋を便利屋か何かと勘違いしているのではないですか？」

仲介と言えば聞こえがいいが、実のところは面倒事を俺に押し付けているだけなのである。

「依頼主に君の番号を教えるのが私の仕事でね。その内容に関しては一切関知しない。…そんなルールすらわすれてしまったのですか？」

ただ、その面倒事を放り出すことも他の人に頼むことも出来ない。

Errors——俗物的に言ってしまうえば、日本で言う魍魎魍魎の類。国外では悪魔やら妖精やら。そんな化物達を管理、あるいは保護をして人類を守る事を目的とした非法の組織に属している事が、遠野周の本職だ。∴正直、どうして人類を守る会みたいなモノにマワリさんが入れたのか。

マワリさんは基本、自ら動くことはない。動くのは俺が担当しているからで———というかあの人を動かすようなことは出来れば避けたい。マワリさんが動く時は保護というの名のジェノサイドが始まるのだ。人権とか一切なく、手段も問わずの殲滅作戦。さらに相手の生死は問わずのオマケ付き。

「∴いえ、その辺はよく理解しています。何も言わず、名にも関わらず、ただ遠くから傍観することがマワリさんのやり方ですからね」

「その通り。∴ですが、あなたの頼みというなら少なからず協力しても構わないとも思っています」

なにやら裏を感じれずにはいられない笑顔で答えるマワリさん。

しかし、だ。

今回の情報は情報が無すぎる。今はそんな事を気にしていられない。

「じゃあ、聞きますけど。今回の依頼についての情報を本当に何も知らないってことは無いですよね？」

「知ってます。おかげで余計な面倒事が増えてしまってますね。これでは私も動かなければならないかもしれない。：まったく、些細な事というから点数稼ぎに志願したというのにこれでは話が違ってきましたね」

この人は自ら動くことをせずに他人を動かして、後でおいしい所だけを搔っ攫っていく人間なので、自分が動くことは嫌いなんだろう。でも、現場で動くマワリさんは、腕が二本とは思えない指示と動きを魅せるらしい、と聞いたことがある。――ホントこの人、何者？

「いえ、あんな屑の事はどうでもいいですね。それで常夏くん。キミは、いま町で流行っている噂の内容は知っていますか？」

「話を聞けばインフルエンザが流行ってる話ですか？ それなら昨日の夜に聞きましたよ。なんでも、何時どこで聞いたのか全くわからないみたいな話らしいって」

「それはアンリちゃんが言っていたのですね？」

あ、なんだろう、マワリさんがスゲー不気味な笑顔でこっち見てる。
…マジで怖いだれかたすけて。

「常夏くん。何度も言いますが、言いたいが三つあります。一つ、屑は屑らしく生きろ。一つ、アレとは縁を切れ。一つ、私は、アレが嫌いです」

「ホント何度も聞きましたね、それ。まさに生理的に受け付けないみたいに」

「あたりまえです。あれで眼鏡をかけていなければ、二度とこの町に居られないようにしていたところですよ」

「いやいや。アイツはアイツで清く、正しく、をモットーにやりますから。そういうのは勘弁してやってくださいよ。それに少なからず役に立っているでしょう？」

「…ふん。本当にそう生きるためにこの町にいるなら問題はないですよ。…で本題ですが、さっきの噂が私の面倒事は一つがそれなんです。キミの言うとおり、噂の出所は全くの不明。いつの間にか勝手に記憶の中に入っている。おそらく、そういった操作の出来る類が動いているとみています。これがそれに関する資料です」

いつ、どこから出したのか。数冊の本を押し付けられた。いろいろ助けてくれるのはいいんだが、明らかに利用されているのがわかる。だって、マワリさんいい笑顔ですから。

「…………あの、マワリさん。これ、ただの妖精とか妖怪に関する絵本にしか見えないんですが」

「それで間違いないですよ。…まあ、手元にある資料がそれしかなかったんですよ。童心に帰るのも悪くないと思って目を通しておいてください」

嫌がりながらも一緒に資料に目を通してくれるマワリさん。苦笑いしながら説明してくれる。こうしていれば本当にイケメンなんだけどな。マジもつたいない。

「というか、噂だけで被害なんて出てるんですか？」

「だから面倒事になってると言ったではないですか。噂程度なら私が動かずとも問題ありませんが、問題があるとするならば、その噂を（・）聞いた（・・・）人間が（・）噂と（・）同じ（・・・）症状を（・）訴えて（・・・）いるん（・・・）です（・・・）よ（・）」

それはまたマワリさんにとって嫌な流れになってきたね。そして、俺にとっても嫌な流れになりがったし。

「まさか。噂程度で被害が出るなんて」

「キミの方にも出ているのではないのですか、常夏くん？」

………… いやだなあ、隠し事ばれてんですけど。

「悪い事ばかりではないですね。おそらく、これ以上協力しない方が私にとって都合がよさそうですね」

「げっ。ここまで話しておいてそれりやないですよ。それに点数稼ぎはどうするんですか？」

ふむ、と顎に手を当てながら考えるマワリさん。しかし、これはただの振りだ。この人に正義なんて一握りも存在しねえ。

「面倒なんで後をお願いします。何、君の事だ。どうせ明日には解決させているはずですから」

これが、何度目かの、悪魔の降臨する現場を持った瞬間だった。

大暮市には市が運営していた工場があった。

大暮造船工場。それが工場の名称だ。

工場を作る話が決まった時、かなりの話題となった。多くの地元
の住人やほかの町からも多くの雇用が確保できるとあって、市の大
きな経済効果を与えると予測された。そして、工場が完成してみれ
ば予想以上の結果をもたらし、その周辺には食堂や売店といった店
が構え活気かるものとなった。

もっとも、それは一年前の話である。今では老朽化が進み取り壊
すことになったが、そこで働いていた人たちは職を失い、それにつ
いての対策が決まったのがつい半年前の話だ。

三棟ある工場はもぬけの殻だ。鉄板を加工する機材も船を動かす
ためのクレーンもありはしなかった。夕暮れという事もあって昭和

の名残のように寂しさを感じる。

一番奥の建物が怪しい。なんていっても他の建物と違って完全密封型だ。なんのためにそんな構造に何てるのかは知らんが。あれなら何かよくない事をしていても外には漏れない。

ここに来たのはマワリさんからの情報によるものだ。

『あそこで良くない事が起きたことは知ってますね』

死人は出なかったみたいだがそんな事件があったらしい。

『事件の内容が不可解なものでしてね。今回のとの関連性は絶対ではないですが、あると思いますよ』

そんなマワリさんの口車に乗せられたような形でここまで来たが、明らかに利用されてるね。

正面の入り口は錆びついて開かなかったが、裏口が開いていたので構わず侵入、侵入と。

コンクリートの通路を音を立てながら歩く。空が曇っているため、

天井の隙間からも明かりがない。辺りの輪郭さえ把握できないほどの暗闇。一寸先は闇。そんな中を壁伝いに通路を進みながら気づいた。

「……溢れすぎだろ、おい」

奥に進めば進むほど空気が濁っていく。海が近いせいもあるのか、とても酷い匂い。普通の人ならここで引き返すか躊躇する場面だが。困ったことに俺はまっとうな人間ではなかった。

——神隠し。

子供の頃。俺はどうやら、そんな御伽話のような不思議体験をしたらしい。

約五年間。

俺はその長い時間、この世から消えていた。その間、両親は必死に俺を捜索したらしい。警察に届け出て、貼り紙をしたり、知りうる手段を講じたらしい。

そして、そんな親の心配や苦勞を知らず、俺は五年後にひょっこり帰還した。

親類、或いは知人、警察の方でも死者が蘇ったぐらいのショックを受けたそうで、いや、つまり俺は世間的に死んだ事になっていた

のだ。…まあ、当たり前だが。

そして自身も、それほど大げさではないけれど、ある衝撃を受けていた。

自身に確証を持ってない。今までの記憶と身に刻まれた年月がどうもおかしいのだ。心と体がずれている。正確に言えば、これは身体の方は問題ない。問題なのが心だ。消えていた五年間の記憶、思い出せないのではなく、全くないのだ。

身体だけは成長したが、精神は昔のままなのだ。まあ、なんていうか、中身は別のところに居て、この体を操作してみたいな他人の体を動かしている感覚でひどく気持ち悪い。

医師達からは過度のストレスによる記憶障害——俗に言う記憶喪失と呼ばれるものと診断された。

いつか思い出す、なんて無責任な事を言われたが、それは本当に取り戻せるのか。答えはまだ出ていないが、ここに戻ってから十年間、それらしい断片的な記憶すら思い出せていない。これだけ聞けば絶望的でしかないが、正直、可能性の事などどうでもいい。思い出さなくていい、いや、思い出したいくないとも感じている。今更そんなものに未練はないし、取り戻した所で迷惑極まりない。

だから、あの五年間は死んでいた。

そう、思っている。その方が安易で楽だから。

…ただ、そんな考えを持つようになってからだ。

何かを『失う』事に脅威を感じなくなった自分に気づいたのは。

記憶の一部が欠ければ、感情も一部欠けてしまうのか。或いは自己防衛だったのか。不思議なことに、記憶の紛失と共に、俺の心も欠けてしまった。

肉体を失われる事で、精神が欠けるということは聞いたことはあるが、記憶の欠損によっての心の損傷もないとは言い切れないと思う。少なくとも、上池常夏という人間はそのケースに当て嵌まる。

マワリさん曰く。持っている人間と持っていない人間。持っている人間は持っているモノに気づく事が難しく様々なしがらみに囚われやすい。何も持っていない人間は何もないため純粋に混ざりものが少なくそれが故に強い。ただ、どちらにもメリットもデメリットが存在しますのでどちらが正しいとかなないとか。

結局、何が言いたいのかさっぱりだったが。ようは俺は何も持っていないためにマワリさんにとって使い勝手のいい駒なんだろう。…まあ、仕方がない事だ。人生の四分の一は死んでいたのだから。

ようやく通路の終わりが見える。どれだけ歩いたのか。奥からの日の光がとても眩しい。

開きかけてドアを開ける。

その先には――――。

なんとか、無事に廃工場を抜け出せた。

放って置けば大暮市に新たな心霊スポットが誕生するのは明白だが、一週間前に起きた事件以上の事は起きないだろう。…ただ、取り壊し作業は進まないだろうが。

「……まあ、寂れた町だし。階段の一つや二つ増えたところで問題ないと思うであつた、まる」

それに、この町に数少ない怪談話を担う神社の住人として、熟せばいい出来になる話を潰すわけにはいかない。そもそも、情報が間違っていたんだからこれぐらい見逃してもいいと思う。唯一、気がかりなのが目的の手掛かりがなかった事だが。それは明日、マワリさんに文句を言えば事足りる。

さあ、帰ろうか。

今日は一日中動いて疲れたし、丸一日絶食ははつらい。家に帰れば非常食にありつける。

急いで、帰路につこうと早足になる。

——ふと、廃工場へ振り返る。

出来れば errorsなんて輩には関わりたくない。関われば見たくもないモノを見せつけられそうな気がする。

今の俺は限界だ。これ以上、他人とか気持ちとか記憶とか、その重さは背負えない。今背負っているのも両手を使ってギリギリだし、自身も強いわけでもない。これ以上強くなれるとも思えない。なりたいたとも思えない。今あるものでどうにかしておくしかない。

まあ。これは俺の薄汚い意地みたいなものだ。

小さい頃から時々、変なモノが見えた。

それは他の人には見えず、俺にしか見えていなかった。

俺だけの、俺の為だけの世界……
そう、感じずにはいられない世界がそこにはあった。

「…ホント、馬鹿だ」

家の帰り道。

途中には移り建てられた病院がある。

どこぞの有名な人物がデザインと設計に関わったらしい。なんでも次世代の担う新たな病院を表したとかなんとか。素人からすれば、何がどう他と違うのか分からない辺りが特徴の建物。

近くには百台は軽く停められる駐車場があるが、半分以上埋まった光景を見たことは未だ皆無。市民の血税が無駄使いされたである。真面目にやれよ市役員。もっとも、俺は一銭も税なんて払ってませんけどね。

まあ、実際にはマワリさんがその辺の事を処理してくれているのだ。

こちら側に帰ってきた俺は記憶の他に失ったものがある。戻ってきた時、俺の目の前に広がる光景は丁度葬式の真っ最中だったのだ、両親の。

原因は自殺。動機は、失踪した一人息子の手掛かりが五年間一切

見つからぬ事の不安感からの突発的な心中、という事らしい。どうやら俺の親は俺が死んだと思ったらしい。勝手に殺すな。

ただ、そんな両親でも残してくれた物あり、それがあの神社と莫大な遺産だ。両親は死ぬ前に色々手を回してくれたようで、資産の管理がある人物に任せた。その契約には、もしも俺が戻ってきた時の事も含まれていた。

その辺りは感謝に堪えないが。ただ、任せた人物が非常にまずい。なんて言っちゃって、我ら弱き者の敵、遠野周その人。その結果、上池常夏にとって遠野周は仲介者である以前に保護者でもあるのだ。あはは。――誰だよ、こんなに俺の命運握らせた馬鹿は。

マワリさんにとって、これ以上ない話だったろう。俺が戻ってこなければすべて自分の物になり、戻ってきてても資産の一部を自分のものに出来る上に、好きに使える犬を獲得できたのだから。

両親との約束を守って社会的弱者である俺の保護者を買って出てくれた事は感謝しているが、保護者の肩書を盾に厄介事を押し付けてくるのはやめて欲しい。

真っ暗な空が背景である病院を見上げる。

病院というだけあって、それがよく似合っている。怪談話の一つになってもおかしくない。

建物の表面には行儀良く並んだ窓ガラスで、今は月明かりだけを反射している。

時刻はもうすぐ十二時を回るところ。当たり前だが、病室の階から明かりはない。みな眠りにについているのだろう。

その時、つまらないものが目にとまった。
屋上の下の五階、一室の窓。

窓から次々、町へ飛んでいく。いや、流されている。

風邪は無い。夜気の冷たさはもうじき冬が到来するのだとわかる。

ふわり、ふわり。イメージはタンポポが種を飛ばす光景。
しかし、飛ばしているのは種ではあるが、それは噂の種。

ぶるりと、体が疼き、体が震える。
もちろん、肌寒くて。

理解は出来てしまった。

面倒ではあるが、見てしまったのは仕方がない。

そうして、種は真っ暗な海を漂うように流れていった。

「ほう。ではあそこにはそんなものが蔓延んでいるのですね」

マワリさんは何か嬉しそうに答える。

アレの放つオーラを感じたくなかったので、出来るだけ離れて椅子に座る。まずいコーヒーを啜る。

頭上の空は穏やかだが、目の前のアレは穏やかではない。

一際強い風が吹いた。

それは廃墟裏に広がる森の奥へは音を立てて消えた。

ここは廃墟内にある中庭である。

取り壊しの際、偶然に出来た産物。

これは中庭ではないとか誰かが言っていたが、俺にはどうにも中庭というイメージしか湧かないため勝手にそう呼んでいる。

天井だけが崩れ瓦礫が床に散乱しているが、位置や開いた天井の場所が良かったのか。ここのフロアだけは明るい空間となっている。

「では、さっそく市長に連絡を入れておきましょう。どうせ、結果はどうあれ取り壊し作業は再開するみたいですから」

昨日ぶりに会ったお兄さんは何が楽しいのか、すげえご機嫌。

「それにしても怪我人の四人の内、一人が重傷ですか。…む、ちょっと、常夏くんこれ見てください！精神に異常ありと診断された数が二桁を超えています！二桁ですよ二桁？作業中、極度の錯乱状態に陥り、正常な判断が出来なかった、か。いやいや、よっぽどあそこが気に入ってるようですね」

「そーッスね。居心地は良さそうに見えましたから。…多分、本業の人が来ないとアレ、無理そうですね」

あの造船所の取り壊し作業中に作業員が錯乱し、重機を暴走させた挙句、同僚に怪我を負わせた騒ぎがあったのは一週間前の事。

幸いなことに死亡者までは出なかったが、その後、作業を引き継ぐ業者が現れず作業は中断したままである。

当然だ。死亡者こそ出ていないがここまで大事に、しかも精神異常

者が出たなんて聞くだけで関わりたくない。人災が出ては仕方がない。誰だって何が起きるかわからない曰くの仕事はやりたくない。

「むむっ。備考……、数年前から度々、目撃情報があったと近隣住人から証言あり……証言の信憑性はともかく、市で独自に調査する必要あり……いやいや、調査などせずにさっさと工場一帯を爆破してしまえばすぐに済む話ではないですか」

ふふふ、それが出来ないから調査が必要なんだと思いますよ。後、さっきからパラパラと見てる資料、明らかに重要な役所の資料だね？

「しかし、これでは建物内に入って準備しなければならないから無理そうですね。いっそ空爆でも……おや、これは市長からの提案……敷地内のお祓い……。いや、ほんとこの市長さんは何を考えているのだから……ははは、やはり却下されてますね」

未だかつて無いほどに上機嫌なトオマワリさん。超饒舌。超怖い。こんな悪魔が大暮市で野放しになっているなんて誰も思うまい。

「それで常夏くん、本題に入りますが。——本当にそれを見たのですか？」

「あー、まあ、そうです」

「興味深いですね。特に噂の種を飛ばしている、なんて表現を使うあたりが」

「――――」

「冗談です。さて、――いや、でも、内容はともかく表現そのものには興味を抱きましたよ」

「いや、ほんと、マワリさんのフォローとか鳥肌ものなんで、さっさと返事ください」

そして、早くここから逃げ出したい。こんな状態のマワリさんを相手に尋問なんて拷問に等しい。

「では、ノー、と答えておきましょう。今回の件、確かに死体こそ出ていませんが、被害は出ている。つまりこれは保護の対象になります。――よってキミの言う処置は承諾しかねます」

やっぱりかあ。いや、わかってたけどね。ただ、出来心みたいな思い付きで言ってみただけ。

「…それにしても。昨日はそうでもなかったですけど、今日はいつもに増して積極的ですな」

「俺だって偶にはエサ代くらいは働きますよ」

「いい心がけです。屑は屑らしく、強者に従っていればいいのです」

すごいなあこの人、この勢いで一生こき使う気だ。

「ところで、常夏くん。その正体は掴めたのですか？」

そんなの俺が知りたい。病院で飛んでいたのが噂を流している犯人だとわかった。

しかし、それで噂の内容が発症するのはおかしい。今回の事件に関して、アレは単に噂を流行らせるという役割でしかないはず。というよりそれしか能のない怪異。空想を運ぶだけで現実になることは無い。

しかし、この噂は流行り病のように人から人へ移って発症する。…この事を知ると病も噂も似たものだと思えてしまう。どちらにしても、人から人へ移り流行るものだし。

「噂を流す方は、なんとなく。ただ、噂が発症するのはさっぱり。」

……やっぱり、これって」

「人間もこの件に関わっている、そう、言いたいのですね」

マワリさんは嬉しげに、清々しいまでの殺意で気温が下がる。

……まいった。さすがに危機管理に疎い俺でさえ、身の危険を感じてしまった。

遠野マワリはerrorと呼ばれるものにはそこまで嫌悪を見せないが、それに加担、或いはそれらの力を乱用する人間を許さない人だ。

宗教的なローブが普段着の変人にとって、敵そのものだ。

……少し記憶に耽る。ずれた心と体。その使い方を教えてくれたのは、初めて依頼を受けた時の事だった。



Errors。

この名前に由来はhumans errorから取られたものらしい。

Error とは本来、見えないものが見えたり、その見えない存在の力を使う人間の事を指していた。超能力、霊能力、魔法使いと呼ばれる者もそれに属している。

しかし、それら全ての能力を行使するうえで、媒体となる存在が必要不可欠であり、それら媒体の補助、或いは媒体となる存在の力を使い、現実に影響を与えている。

そして、その媒体が妖怪や悪魔、妖精など空想的な存在であり、世界を構築する、木、火、土、金、水、風、空の七つの元素でもある。

……例えば、平安時代に活躍したという陰陽師で言えば。怪しげな呪詛を呟き、式神を従えて妖あやかを退けて都を守った。式神は陰陽師の卓越した能力の象徴でもある。

古来、式神は『識』神と記されることが多かった。この文字は古代中国では『魂』、『精霊』に近い意味を持った言葉でもある。その中には『使鬼』という表現もある。

式神は『識神』であり、隠された知識を『識る』ことで、意のままに操る事の出来る霊的な存在。それはつまり、妖と同じ存在とは考えられないだろうか。

空想の存在ではなく、人の身ではなし得ぬ事ができる人間のerror が、空想を現実にする人間こそがerror と呼ばれるのが本来正しい。

——しかし、そこに人のエゴが発生した。

“人間は許容の狭い生き物です。自らの行いの非を認めず、別の何かにすり替えてしまうものです。それが他人だったり、神だったり……”

Error と呼ばれる人間がなんらかの害を発生させる時、必ず触媒が必要となる。それがどのような場合でも。そして、一部の人間はこう考えたんだろう。

『我々はそそのかされたのだ』

自分たちの罪を不確かなものに押し付けたのだ。後は、言うまでもないが時間の経過と共に少しずつ改竄されていき、今では空想が現実になり替わってしまった。

いや、別にそれが悪いとか言いたいわけではない。そうやって人は積み重ねてきたわけだし。

“——ああ、勘違いしないようにね。全ての事が悪いのではなく、世界の半分が悪なのです”

人間ひいきで言えば、魑魅魍魎の類が悪で人類が善。Errors が人をそそのかして悪行へ走らせる、と言ったところが面白いさん

達の見解だろう。

何もしてなくとも悪として見られるなんて堪ったもんじゃないが、あちらさんは、その事を気にしているのだろうか。…意志とか無い奴いるし、その辺は微妙だな。

まあ、騙される方も悪いと思うが、そう思いたくないのも人間って生き物らしい。

“ はは、キミにはわからないだろうね。常夏くんのは、まっとうに生きてきた人の考えです。いいですか、こういうのは悪である事を責めるのではなく、どうしてその行為を行うかを考慮すべきなんです”

だから、どっちにしても同じなら、どうでもいいと思うようにした。だって、いくら害がないって言っても、結局 error なんだから。

「それで、常夏くんはどうするのですか？それだけやる気になってるのだから、まさか、このまま引き下がるつもりはないですよね」

「そのつもりですけど」

「おやおや」

ご愁傷様です、と合掌するマワリさん。いや、あんたがするとシャレになんねえです。——マジ、通報とかしやがりそうだ。

「でも、常夏くん。いつもやる気のないキミが、なぜこうも積極的なんでしょうか。何か良い事でもありましたか？」

まあ、今回のケースは今までは違うと感じてる。

「ああ、なんとなく読めましたよ。なんだ、キミ、半年も仕事が出来なかったから飢えていたのですね」

コーヒーカップで口元が見えないが、薄気味悪い笑みで笑っているのがなんとなくわかる。

「はあ？何それ、全然違いますよ。いつもは終わった後すぐに次が来たりで、あんまり休めなくて疲れてただけで、なにより今回ののはアイツが——」

あ、何言ってるの。やっぱ、飢えてるより質が悪い俺。

「ないない、それはないから、そんな気色悪い理由じゃない。……ほら、つまりあれっスよ。今回のってイタズラみたいな軽い悪意みたいなものじゃないですか」

つまり動機だ。今回の噂話の事件は、噂さえ聞くようなことが無ければ発症する事はない。もし、目的があって行動するなら、こんな噂を聞かなければ害の無い、なんて回りくどいことはしない。やるならもっとシンプルでわかりやすいはず。

だけど、今回ののは、何がしたいのか分からない。目的が無い。人を困らせたいのか、誰かを殺したいとも思えない。遊び感覚でやっているように思える。

「ほう。要するに信念の無い悪行はただのお遊びで、噂を広めて個人が楽しむだけの行動は目的のある悪意より罪は軽いと言いたいのですね、常夏くんは。でも、おかしいですね。発症するような噂が流れる前は、同じようにいつの間にか聞いていたようですが、“無害”そのものでした。しかし、今流れているのは“害”のある噂。遊び軽い悪意なら、なぜ、噂を流すだけに留めなかったのかな？」

「それは」

どこにでも流行りそうな“無害”の噂。最近になって蔓延する“害”のある噂。

言うまでもない。イタズラはエスカレートしていくものだ。

「目的はなく噂を流しているだけなら、どうしてそこに運悪ければ人が死ぬ可能性を出す真似をする？キミの言う、ただのイタズラなのには？」

「だからそれは」

最初から目的があって行動したのではなく。
途中から目的を持ってしまったのだ。

「そういう事です。もうただの噂を流すだけでは満足出来なくなっている。後、興味が持てそうなのが、噂が現実になることだった」

「でも、死ぬ可能性はあるって。まだそんな噂流れてないじゃないですか」

「いえ、それがそうとも言えないかもしれません。——今朝、連絡があったのですが」

日差しの中で、にんまりと笑う三日月の口。ようやく、本性出しやがった。

「男性が担ぎ込まれたそうです。症状から見て、原因は不明。なんとか持ち直したようですが——ふむ、何時まで持つのやら」

ようやくわかった。あの変態はこの話で俺を揺さぶって、本当の意

味で俺をやる気にするのが目的らしい。だから、今日はやけに機嫌がいいわけだ。

「――流したんですかね、噂」

「さあ？ 私にはわかりませんね」

「そいつは、人間が憎いってコトなのかな」

「？……、それは問題ではないと思いますが。けどまあ、死人が出るようなことになればそれまで。殺人事件ではないですが、私が動かざる負えなくなる。まあ、一時間もあれば済むことですから」

マワリさんの口車に乗せられるの癪だが、まあ、一応様子を見に行っただけはしてこよう。なによりも、ここから離れたいし。

「ちょっと、出ていきます。腹が減ったんで」

「おや？ 行くのですか。やはり常夏くんは頼りになりますね。――モノのついでに、もう一つ頼まれてくれませんか？」

「今日中に死ぬ予定があるなら聞きますよ、遺言として」

薄暗い風景から明るい風景に変わる。

精神的によろしくない人物から解放されたことを外の空気を吸って実感していた。

そうやって深呼吸して気づいたが、お日様は真上にある。おそらく昼を過ぎたところ。

軽く四時間は、あそこで話を聞かされていたことになる。正直、驚きより恐怖を感じてしまう。もしや、あそこには時間の概念が無いのでは。

いけ好かない変人は笑う。

クソッ。あの人になにか言われると余計なことまで考えちまう。

夜まで、後五時間。まだ五時間もあるのか、あと五時間しかないのか。正直微妙な待ち時間だ。



気がつくとも夜になっていた。

気分はとても憂鬱。…なのに体はうずうずしている。

体は正直とはまさにこの事だ。気持ちはその気が無くても体が勝手に準備してやがる。

寝ていたソファから起きる。外は日が沈み暗闇に包まれているため、明かりがない部屋は真っ暗。

なんとなく、横のベッドに目をやる。

そこにはアンリが寝ている。なんとも緩みきった寝顔で殴りたくなる。

時刻はジャスト七時。

乗り気はしないが、様子だけでも見に行くか。

ソファから立ち上がり、部屋を出ようとする。

「……ジョウカ？」

不意に、背後から聞き慣れた声がした。

「…悪い。起こしたな」

「いえ。ふと目が覚めただけですから」

…コイツ、本能的に察知したのではないだろうか。

「それで、ジョウカ。どこかへ行くのですか？」

「ああ、ちよっくら用事を済ませにな」

「…そうですか」

なんとも、アンリにしては歯切れが悪いっつか。いつもなら咎められる筈なのに、今日はやけに大人しい。

「どうした。腹でも減ったか？」

「――――」

返事が無い。嫌な予感を噛み殺す。

「…新しい噂、町に流れていますか？」

やばい、本気で眩暈がする。噂が発症する事を、今現在体験中のア
ンリの事だ。次に話す内容次第でどうなるのかは分かっている。

「噂、聞いたのか？」

零れた声は自分でもどうかと思うほど冷たかった。

反応なし。どう判断していいのか考えている矢先、

「――――たすけて、ジョウ、カ」

震えた、今にも泣きそうな声を発して、倒れた。

「おい」

近づき体を揺さぶる。反応はない。噂を聞いて発症したのか意識を失っている。体の疼きが熱を持ちやがって頭を焦がす。半ば無意識にテーブルに置いてある携帯電話を手に取り、部屋を出た。

家がある山から下りて国道に出た。目の前にはタクシーが一台止まっている。今日に限って都合の良いことで。

構わず乗車。

「あ、もしもし。上池です。今から噂を垂れ流す馬鹿のそこ、行くかと思うっているんですけど、マワリさんの方で保護の要請を出してもらえますか？こっちは今から十分もあれば着くと思うんですけど。あ、やっぱいきなり過ぎて無理ですよー」

マワリさんでも俺の行動は予想外だったようだ。以外に使えないんだよね、この人。

「え、二時間待て？あー、それ無理っぽいんです。なんつーか、体の方がやる気満々なんで止められそうにもないです。なんで、マワリさんが来てくれれば問題ないはずですよ。はあ？隣町でロックバンドのライブを見てる？なにそれ信じらんねえ」

状況は最悪。Error相手なら俺だけでもなんとかなるが、その後の後始末が問題だ。上手くやないと俺、捕まっちゃうからね。

「まあ、いいです。先行ってます。こっちが終わってなかったら援護よろしくです。場所は分かってますよね？はい、じゃあ交通違反とか関係なしにゴー、しちゃってください」

電話を切る。マワリさんの事だから一時間あれば着くだろう。

——さて。

不本意極まりないが、やらなければいけない理由が出来てしまった。相手に恨みとか憎しみとかそんなもんはないが、二度とこんな事が起こらないように徹底的にやろうか。

昨夜となんら変わらない病院は、今日も名に恥じぬ存在感を醸し出していた。

しかし、ガランとした空気が重い。なぜだろう。昨日と別段、変化した所はないのに。

「…そうか。今日は飛んでないのか」
さすがに連続はキツイのかな。

正面玄関を素通りして、非常口の窓を破る。
幸いなことに病院の警備はザルだった為、コソ泥よろしく不法侵入完了。しかし、ここからが本番。目標のねぐらは五階の一番端。そこまで気付かれずに行けるかどうか。

長い階段。一番上の階を見ようとするが、暗闇で何も見えない。
ましてや、ここは夜の病院。普通なら引き返すのがまっとうな考えだが、俺には関係ない。いや、怖いものは怖い。

体の疼きが鬱陶しい。そんな反応しなくても、ここに何がいるかわかっているというのに。体だけ先走ったところ心が追いつかなければ、なんの意味がない。

今更だが、この体と自身の精神とのズレは十年間も味わってきたが、どうしても慣れない。まるで他人の体だ。

違和感があっても年月と共に誤差が修正されていくものだと思うが、なぜ、こうも俺の体は全く馴染まないのか。

五階の階段を上りきる直前、夜の病院には似合わない歌声が聞こえた。

やけに耳につく声。

今の精神上、苛立ちでしかないはずの歌。
しかし、その歌声は苛立った心を鎮める。

耳障りだ。夜の病院で歌うなど、正気とは到底思えない。

通り過ぎる用のない病室。部屋から聞こえる寝息。暗闇ながら感じ

る生活臭。夜は静かだが、人が平和に暮らしていることがわかる。

そうしてたどり着いたのは一番奥のある今泉^{いまい}という名字の病室だった。

廃墟、墓場、残骸

入り口前で見据えるそこは他とは何ら変わらないものだ。だから、先ほど感じたイメージは俺の勘違いのはず。

そこには先ほどのように人が生活している感じが無い。あるのは、薄暗い空気の無数に漂う物体。もとは穏やかな存在だったろうと思うが、もともとが分からないため、予想でしかない。

そうして――――気づけば扉に手を伸ばしていた。歌は未だ鳴り響く。発信源は目の前。

雲から顔を出した月が、暗い病室を照らす。賛美歌を歌っていたのは少女だった。病的と言えはいいのだろう。青み掛かった黒く長い髪。日の光を全く浴びていないような白い肌。病院というだけあってよく似合っていて、あまりにもそぐわない存在感だ。

外の景色を見ていて、此方に気づいていないのか、歌い続ける少女。

食べていなのか、或いは食べれないのか。歌声からは想像できないか細い身体。どこから、こんな歌声を出す力があるのかと疑問に思う。

自身から少女までの距離、三メートル弱。あと少し——あと二歩で俺の射程圏内に入る。……のだが、途中で漂う物体に阻まれる。邪魔すんな、クソ——

「こんにちは、珍しいお客さん」

邪魔してソレが知らせたのか。鳴り響いていた歌が止んだ。そして、此方へ振り向いた少女は丁寧に挨拶してきた。——おかしい。

「…ん？——あつ、そっかあ。今はこんにちはじゃなくて、こんばんは、だね」

ごめんなさい、と頭を下げる少女。——おかしい。少女は年相応の言葉使いでこちらに話しかけてくるし、こっちはつきりと聞き取れているのだが、少女の口は全く動いていない。

「それでお兄さんは…。あつ、その前に自己紹介しないとね。私の名前は——」

少女は見知らぬ来訪者が来たことが嬉しいのか、ウキウキと余分なことをしようとする。

「いらない。そんな見合いのような事をしに此処へ来たわけじゃねえし」

「…そっかあ」

やはり、来客が来たことが嬉しかったようだ。少女は目に見えて落胆する。…しかし、どうにも口を動かされずに会話されるのは違和感が付きまとうな。

「じゃあ、お兄さんはどうしてここへ来たの？もしかして、私の歌を聴いてここへ来てくれたの？」

首を傾げて尋ねられる。

確かに歌につられてこの病室に来たといえは来たが、正確には町に蔓延する噂の事と昨夜この病室から飛んでいく噂を見てここに来たから少し違うのか。

「歌はこの階に上がってから聞いたから違うな」

「あれっ？ 違うの！？ てっきり私は……。：うん、そう、だよ。ね。歌を聴いて来たならもっと早くここへ来てくれなきゃおかしいもんね……。」

「おい。話が見えてこねえから」

「あれ？ だから歌だよ？」

まずいなあ。頑張って懺悔だけでも聞いてやろうと思ったんだけど、その前に理性が吹っ飛びそうだ。しかも、相手は口動かさずに話してくるから人形と会話しているみたいで現実味がない。まあ、そんな事より噂を流したのはお前なのか、そこをハッキリせろ。

「——おい。一応聞くが噂を流してんの、おまえで間違いない？」

空間を漂う物体が肌を撫でる。うなじの骨が、不快感によって軋む。

「噂って、：どういうこと？」

「そのままの意味だよ。今も町で飛び交っている」

少女は何かを考えるように視界を窓側に向ける。そこからは大暮市

が一望できる風景が広がっている。

少女はパァッと思い出したようにベッドから降りて、

「うん！ 私がその歌をみんなに届けてるの。最初は聞いてくれなかったけど……」

ぺたぺたと、こちらに向かって歩き出した。周りに不愉快極まりないモノを引き連れて。…普通に逃げ出したい。

「もしかして。誰も聴いてくれないから、仕返しのためであんな噂流してるワケ？」

「ちがうよ。みんなが私の歌を聴いてくれないのは私のせい。私が出来の悪い歌を歌ったから聴いてくれないのはみんなのせいじゃない。…だから、前より出来の良い、派手な歌を歌えば、みんな聴いてくれる。私の歌を、気持ちをも、想いを聴いてくれる……！…そう、この子達が言ってくれたの」

どうでもいい位に聞き慣れた台詞、悲しげな呼吸。

…つまり、こいつはこの部屋に漂う物体の戯言に乗ったと言いたいらしい。

「だから届けるの。…ううん、届けないといけないの、今の私を…！そうすれば、みんな私と同じになって私の歌を聴いてくれる…！」

少女がどのような病魔に侵されているのかは知らない。俺には関係ない事だし、興味も持てない。ただ、解ることがある。彼女はおそらく、相手に自分の気持ちを伝える手段の一つを、言葉を失ったのだろう。話すことを。喋ることが出来ないのだ。しかし、上手く伝わらないのは自身が悪いと自覚しながら、確実に俺へ気持ちをぶつけてくる。

「だから、ごめんなさい」

これから同じ境遇になる人たちに対してなのか。とりあえず、それには俺も含まれているようだ。さっきから、俺の周りに漂うモノが増えてやがる。

「私にはこうするしか伝えることが出来ないの、こうするしかないの、これだけなの、これは神様が私に与えた試練なの、私にしかできない事で、私だけ与えられたもの…！」

少女は伝えれないことは自分のせいだと言い、こんな体になったのは神のせいだと言い、自らの行いに対して自分を守っている。

——俺も人の事は言えないが、コイツはもうダメだ。周りを巻き込むことが嫌だと言いながら、他人を巻き込みやがった。しかも、自分に非があると認めておいて、結局それは居るのか判らないヤツのせいだとすり替えやがった。

ぺた。纏わりつくように漂うそれは俺の自由を奪う。らん。らん。らん。少女が歌っていた賛美歌が頭の中でリピートされ続ける。

「っ……………」

いくら歌が上手いと言っても、これでは大音量で聴いてるようだ。ましてや、歌は耳からではなく、直接頭に響いてくる。普通なら、とうに気がふれているところだ。

「大丈夫。お兄さんも私と同じになれば、私の歌が聞こえる。そうすれば分かる……。分かり合える……！」

自分と同じに、同じ境遇になれば、全て一つになれば分かり合えるって考えだろう。押し付けられる方にしてみれば、たまったもんじやない。というか、頭が回らない。歌のせいかな。うっとうしいほどに頭をかき乱す。苦しい。今すぐ楽になりたい。そうだ、意識を手放せばいい。

賛美歌を子守歌に意識を鎮めようとした瞬間、

“——たすけて、ジョウ、カ”

鼓膜に張り付いた声。それが、頭の中でリフレインする。

少女は此方をうかがう。間近で見るとこれはこれで将来が楽しみな顔立ちをしている。——しかし、それを見ることは叶わないだろう。結果はどうあれ、少女は長くない。

だが——そんな事は今になっては本当にどうでもいい。

「ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい」

「うるせえ。：黙ってろ。ガキが」

ホントに、もう十分だ。コイツの言い分はイヤってほどに分かった。ただ、理解するつもりも、同情するつもりも、我慢するつもりもない。

「自分に非があるってわかっていて、自分が悪いなんて思っていない奴が簡単に謝ってんじゃねえ。そもそも、その謝罪で自分を正当化しようとするな」

「え……………」

前にもこんなバカが居たっけな。まあ、あの時も、何とか助けられるかも、なんて思って動いたけど結局ダメだったワケだし。やっぱアレだ。Errorはerrorでしかないんだよね、これが。

「……お兄さん、髪の毛、色が」

「ああ。お前を見ていと思うしちまうよ。クソッ、せっかく忘れてたのに。——ああ、もう、イラつく。本当にイラつくよ、おまえ」

なりふり構わず、悪態をつく。手助けしたerrorもそうだが、それに頼ったerrorもひどいものだ。

「——クソガキ。いいか、おまえは声を出せないだけ。ただ、他とは少し違って一つ欠けただけだ。なのに、おまえはその零した一つに執着して、自分に残ったモノに目が行かなかっただけの事だろうが。分を弁えろって。いろんなモノ持ってるやつがコツチに来る必要ねえ。ハッキリ言って、邪魔なだけだ」

「ちが、違う、違う、そんなの違う……！ 私には歌しかないの…

…！ 歌いだけなの……！ 今までもそうだったし、これからもう歩いていくの……！ それのどこが悪いって言うの……？」

「あ？ だから、それが悪いって言ってんだよ。これだけ言っても気づかないの？ いいか、人間ってのはいろんなモノを持って生まれてくる。…まあ、生きていく過程で一部失ったり、全部無くなることもあるだろうが、一つしか持っていない人なんていやしねえんだよ」

いろんなモノを持って生まれ、それに気づき、それを生かせるのが強者であって、気づけないから弱者が生まれるのだ。そもそも、そんな何も持たずに生まれたヤツがいるのなら、もうそいつは人間として、

「ああ、確かにおまえは失った。おまえからすれば、全てを失ったんだろうよ。でも——なら、どうしてお前は、まだ、そうして生きてんのさ？」

「…え、…………ア？」

そう、生きている。

もし、本当にすべてを失ったと言うなら生きていたいと思わない。生きてさえないだろう。だが、それでも生きている。なら、その失ったものを誇りに生きろ。それすら認めず、気づかず、捨てたというのなら、生きる価値などない。

「その窓から飛び降りれば、そんな悩まず、苦しむこともないって
いうのにな……。確かに死は怖ろしく、恐いものだ。だから、おまえ
は自ら命を絶つことが出来ず、他人を自分と同じ位置にして一緒に
死んでくれる、自身の死の恐怖を和らげてくれる人間を。つまり、
道ずれが欲しいと願ったんだろ？ そんなのまっとうな人間がする
事じゃない。それじゃどうやったって救われない」

「……うるさい。うるさいうるさいうるさい……！ 何も
失ってない、何も知らない奴が偉そうに！ だまれ……！」

激怒する。頭を抱え、苛立ちを露わにし言葉を失ったerrorは、
俺に向かって物を投げつける。

「私は歌いたいただけ、歌って、想いを、気持ちを形にすることは悪
い事じゃない……。みんなに歌を聴かせて、それが形になった時、
ようやく私は救われるのに、ねえ、どうして……！ どうして、そん
なこと言うの……。！！」

ただ、俺の体に纏わりつくだけだったモノが急激に敵意に変わり、
俺の頭の中に入り込もうとして、

「——いや、なに。勝手に人の抱えてるものに、おまえはちょっ
かい出しやがった——」

問答無用に。肌に纏わりつくモノを、払いのけるために、

「その気持ち、おまえにも教えてやろうと思ってさ」

自身の腕に噛みついた。

ごりごり。と噛みついた箇所からいい音がする。腕から口を離すと景気よく腕から流れる血液。その勢いは止まらず、床に血溜まりが出来る。ここまでやる必要はないが、まあ、文字通り出血大サービスだ。

「っ……………」

腕から痛みが走る。尋常ではない。さっきまで変な歌で頭の中をシエイクされていた事を考えれば、卒倒ものだ。

でも、意識を失わなかったことは幸い。せつかく、心が体に追いつきそうなんだ。久しぶりの現実を味わいたい。

「…は。ははは」

——イタイ。

掻き混ぜられた頭が痛い。世界を見る眼球が痛い。乱れていく呼吸が痛い。

そして何より、噛みついた手首が痛い。

腕から頭に響く激痛。それにより、脳みそがトロけそうなほど麻痺している。

しかし、自身の中を占めているのは、湧き上がる高揚感と心の底からの喜び。笑える。

「……ははは、ハハハハハハハハハハ」

周りにいる不愉快なモノを振り払う。振り払った物体は、より明確な敵意を発してくる。

「…………ケヒッ」

追いつく。五年のブランクを修正して、心と体が一体化する。どく。どく。と心に血液が回る。冷めていた心と欠陥品の体に神経が繋がり、定着する。他人の体がようやく自分のものになる。

いつもながらいね、これ。マジ、最高にハイってやつだよ。俺、今サイコーに充実してるし、やっぱ、他人のより自分のだね。生身サイコー！

「…い、や。…なんなのよお、こいつ！」

震える手で近くの引き出しから果物ナイフを手に取り、こちらに向ける少女。

構わず、少女に一步踏み出す。

「こ、こないでえ！」

さくつと腹部に突き刺さるナイフ。

「おいおい。紙とさえ言われる俺の防御力だ。…もちつと手加減しろよ」

「っ……………。…なんで、…………なんでそんな平気なのよお」

ナイフから手を離して後ずさる少女。

やっべー。なにこれ、腹刺されたのに何かすげえ笑えるんですけど。

「あ——は、は……は……は？　そ、そっかあ、お兄さんも私と同じ、なんだ、ね？」

震える体を抑えつけて、こちらへ近寄ってくる少女。先ほどまであった狂気は感じられない。あるのは、怯えたような歓喜。

「探してた。探し続けてた。私と同じ人。ようやく見つけた、仲間を——」

仲間を見つけた喜びなのか、こちらに震える手を伸ばす。皮と骨。その手は、白く細い枝のように見える。

「懐くな、鬱陶しい。形が似てるからって、同じ生き物なんて言わないでほしい」

ほんと、こいつも学習能力ないね。

伸ばされた手を払い、漂うモノに意識を向ける。

「えっ……………？」

——さあ、そのしがらみ全部捨ててもらうよ。

「え、う……………?」

白は赤へ。

目の前の少女の白い肌が赤く染まる。よく見てみれば、右腕部分の服は真っ赤。

「え———いあ、た、あ……………!?!」

浸食する赤。疼くように突き抜ける痛み。あらゆるモノが流れ出ていく。少女にとって、おそらく、一度経験している事。自身の全てが無くなっていくような感覚。

「や……………いやあ、嫌アああああああ……………!?!」

絶望があがる。悲鳴とも絶叫ともとれる声に、いつもの如く高まる自身の感情。

状況は、見ようによっては悪化。与えようとした者が次々失っていく。

「ああああああ……!! どうして。どうして。どうして……!!!!」

手元からこぼれていく。その落ちたモノを拾おうと視線を床へ向けたが、そこで、ようやくもう一つの赤に気がついた。

「なに、これ……!!? 嫌あ、嫌あ、嫌あ……!! 崩れてる、私崩れてくう……!!」

腹部から広がる赤。声を失った少女は、残っていたモノが無くなっていく事に戸惑っている。それでもなんとか落ちたモノを拾おうと必死に手を動かす。

本来ならその落ちていくモノは見えている以上、触れて掬うことが出来る。だが――

「なんでっ! なんで落ちていくの、私のモノなのに、なんで拾えないの……!!」

今更、無意味だ。

それが自身からあふれ出たモノでも、ソレはもとより捨てたモノであり、ようやく気づいたところで、それは自分には無いと決めつけたモノだ。歌うことで、一つの事柄でしか自身を保てないなど所詮、失ったことを認めれない人間的な弱さだ。そんな人間性が残っていないくせに、こんなヤツらに補ってもらおうなど、人間がやっていい

事ではない。

だって、ほら。普通、人間は他の人間の手によって救われるんだから。

「なんなのよお、こんなの、おかしい……?! 同じ人間なのに全然私と違う……!」

「だから一緒にすんな。おまえはerrorsっていうカテゴリー。それで、俺は」

また、嫌なことを思い出す。忘れたかったが、覚えている。

マワリさん曰く、

「世界を構成する八番目の元素を持つかもしれない、なんとからしい」

噛みついた血だらけの右手。ナイフで刺された腹部。

同じ個所から血を流す少女だが、あれは色は赤でも血液ではない。形のない少女の持ち物。生まれた時、平等で不平等に与えられた人間性を構成するモノ。

だから、あれだけ流れ出しても殺すことは出来ない。まあ、でも、あれはあれで人間やるための血液みたいなもんだから、全部無

くなったどうなるかは別問題だが。

「やだ、やだよ、たすけてよお……！ 苦しみたくないのに、苦しいのいらなにのに、苦しまないようにやってきたのに、なんでこんな苦しいの……？！」

失うことを恐れ、苦しみから解放されるために失ったモノを取り戻そうとした。しかし、それは引き止めることも出来ず、零れ落ちていく。

「もう、こんな思いたくないのに、こんな気持ちいらなにのに、どうして、どうして……！」

彼女にとって、もう、ないと思っていた二度目の体験。

「たすけて、たすけてよお……！ 私は歌いたただけなの、歌い続けていたただけなの、歌うのが好きなの、大好きなの、歌を聴いてくれる人も好きなの、大好きなの……！！ …だから、お兄さんも聴いてくれるなら好きになるから、大好きになるから……！！！」

「うん。気持ちだけ受け取っとく」

悲痛なまでに流す涙。目は焦点が定まらず、だらしなく口元から垂

らす涎。這うように、獣の体勢でこちらに向かってくる様は艶美。えんぴ

「いやあ……違う、違う！あなたは一緒に歌い続けるの、ずっと一緒に聴いてくれるの……！あなたならずと聴いてくれる、死んでも聴いてくれる、……うん、いつまでも一緒、いつまでも好き、いつまでも大好きでいられる、私が死んでも歌い続ける、あなたが死んだら、あなたを思って歌い続ける……！！　ねえ、ねええ、いまでも私の事好きにしていいいから、これから私の体好きに使っていいいから……！！！！　ねえ、だから——」

ああ——こんな断末魔に似た台詞聞いたら、

「それは随分とそそられるお誘いだな。確かになかなかの美人ちゃんになりそうな顔してるよ」

「でしょ……！そうでしょ……！！！」

ホント、もう、

「でも、その前にさあ」

我慢できないほど、

「俺、——歌って嫌いなんだよね」

嫌になる。

「——、あ——」

涙に埋もれた瞳が、呆然とこちらを見る。

少女の最後の赤いしずくが一滴がこぼれる前に、今まで耐えに耐えていた自身の意識を失わせる。——バイバイ、現実。



夢に起きる。

どれだけ、気を失っていたのか。視界には病室の天井が見える。窓の外を見てみると、いまだ暗闇が広がっていた。とりあえず、そんな長くは寝ていたワケではないようだ。

覚醒しきっていない意識の中で、自分の状況を確認する。いつも通りの感覚。――よし、異常ありだが、異常なし。体は正常に稼働中。

むくつと起き上がる――起き上がろうとした。

腹部からヒドイ痛みが走る。

そうだ、俺刺されたんだった。しかも、まだ刺さってるし。

幸い、深く刺さっていなかったが、普段着である作務衣は噛みついた腕部分と腹部は血で染まり、刺された箇所^{いじょう}に穴が開いてしまっている。

上体を起こす。よく見れば、この部屋も殺人現場のようなスプラッタな現状になっている。

「やば。早く、ここから退散しないと」

腹部の痛みはキツイが我慢できる範囲。出血の方は止まっているが、動いたら開きそうだな。まあ、腕の方は大丈夫そうだし、腹は押さえていれば何とかなるだろう。

「おや、もう起きたのですか。いや、まさにゴキブリ並みの生命力と、いったところでしょいか」

「……………」

出来ることなら振り返りたくない。振り返れば見たくもない現実が怖い。

「…しかし、いくら常夏くんとはいえ、そのキズでは少々きつそうですね。…ふむ。では、後の事は気にしないでそのまま寝てください。ちゃんと処理の方は私の方でやっておきますから。もちろん、きみの処理の方も……」

シャキッとすぐさま立ち上がる。

危ない。何が危ないかっていうのは、この人に自分の事を任せたら、刑事ドラマでよく見る現場検証のように証拠物件Aとして、さっきまで倒れていた通りにテープで囲まれていたに違いなからだ。もちろん、俺は死体として。

「どもっす。なんとも、お早いご登場なことで」

「ええ。きみがあんまり急かすもんだから、一時間も掛からずに着いてしまいましたよ」

OH。マジでかつ飛ばしてきやがったよ、この人。

「いや、一時間かかんないとか、なにやったんですか？ 隣町に居たはずなのにありえねえって。街中じゃなくても戻って来るのに一時間は掛かるはずですよ？」

「常夏くん。きみが規則を破ってでも急げって言いましたからね。とりあえず、国家権力の方を行使してみました」

凄いなあ、気のせいじゃなく、本気で眩暈がする。

「…一応聞きますけど、———どんな？」

待ってましたと、口角を吊り上げるマワリさん。

「それは、もちろん。誰しもが憧れ、一度はやってみたと願う、救急車を、あの走る法律をサイレン流しながら、規則など無視して走行する事ですけど、…いや、本気で移動時の足にしたりしましたよ」

無邪氣に、子供ように話す変態。あはは、——誰だよ、コイツに
国家権力^{おもちゃ}なんか与えたのは。

「…もう、いいです。それじゃ俺はこれで。ゴタゴタする前に退散
します」

「そうですね、その方が良さそうですね。——あ、ちょっと常夏
くん。時間は何時でもいいですから、明日、私の家に来てください
ね」

とりあえず承諾。今はこの場から離れたい。こんな所に居たら、い
ろいろ複雑に深く考えて面倒なことに答えが行きそうなんでマジパ
ス。まあ、その辺の折り合いは、まだ、ついていない自分な訳で。

その日、帰り道は遠回りの道を選んだ。

本当は、今すぐに何かを入れたいほど、無性に腹は減っている。そ

ういえば、昼から何も食べていない。

ダメだな。生きている以上、何か食べないといけないというのに。

どれだけ歩いたのか。

見飽きた夜空から視線を外すと、程なくして、月明かりで出来た丸い影が落ちているのに気がついた。

もう一度、夜空を仰ぐ。

視界いっぱい青みかかった夜空が飛び込む。

もうすぐ、夜明け。

なんの変哲のない空。

赤い月を背景に浮かび上がる、噂の種。

「なんだ、まだ飛んでるじゃん」

そうして、種は赤い月の不気味さにもたれるように漂っていった。

つけっぱなしだったのか、テレビの音がうるさいので、仕方がなく起きることにした。



：瞼がすごく重い。まだ、体は睡眠を欲しているみたいだ。それでも、テレビから流れるニュースを聞く限り、どうやら時刻は朝だとわかってしまった。寝すぎるのは良くないと思い、なんとか意識をハッキリさせようと活動してみる。

確か、昨日は昼過ぎに起きて、食事を取ってからまた寝てしまったから、二十時間くらいは寝ていたはずだ。

ベッドから起き上がる。窓の外を見ると少し明るい位の暗さ。

まだ、青さが残る空をぼうっと見ていると部屋の戸が開く音がした。振り返れば、ジヨウカはお持ち帰りしたのか、片手にはジャンクフーの袋を持ち、もう片方でハンバーガーを食っていた。

ジヨウカは相変わらず、作務衣をだらりと着ている。

なんとも似合わない光景である。ジヨウカが作務衣を普段着にしている事やジャンクフードが好きなのは知っているが、この組み合わせは日本文化に対しての冒瀆ではないのか。

もともと、この光景は幾度となく、見てきて慣れてしまっているが、それでも許しがたい。そんな私の事を知っているはずなのに、

「ハロー、アンリ。ご機嫌いかが？」

…これである。この軟派な態度と口調は、…いや、もういい、いつもの事だ。…と、ジャンクフードを持つ右手に包帯を巻かれている事に気づいた。

「おはようございます、ジヨウカ。体調は、まだ少し眠気はありますが、それ以外は問題ありません」

「？ おまえ、意外と頑丈なんだな。昨日あんな事あったのに」

「……………」

確か、昼にジョウカが帰ってきた時以外は眠っていた。ジョウカが帰ってきた時も特になかったはずだ。

「…いや、なんでもない、気にするな。単なる戯言だ」

そう、言うところジョウカは、ボスンツとソファーにもたれる。

なにか不満そうな顔をするジョウカ。…気になることを言うが、追及はしない。こういう時のジョウカは何を言っても返事が返ってこないのは、この二年の付き合いでよく理解している。

しかし、昨日は私が眠っている間に何かあったのだろうか。私はあの噂を聞いてから体調を崩して寝込んでいたから、ほとんど知らない。

…いや、それよりも問い質さなければいけない事がある。

「それで、ジヨウカ。その右手ですが、どうしました？」

「ん？ ああ、これね。なに、ただコケて擦り剥いただけだ」

もちろん、そんな理由ではないとわかっている。ジヨウカもそのことをわかって言っている……と思う。が、そんな事どうでもいい、といった感じに別の話題を振ってきた。

「それより、おまえ腹減ってないか？ 俺の知る限り、昨日から何も食ってないだろう？」

：確かに寝ているだけとはいえ、かなりお腹が減っている。――しかし、ここで話を逸らされたら、なぜか負けだと感じる。それだけは嫌なので、ここは確固たる決意で問い質せねば。

「空いていますけど、今は私の質問が先です。――それで、その腕は本当のところ」

「ああ、そうそう。冷蔵庫に竹屋の団子があったはずだけど、どうする？」

やけに、最後の辺りが強調されている気がする、ジヨウカ。…今なら、人質を取られた人の気持ちがわかる気がする。

「っ………………。……………たべます」

そうか、と薄く笑う、ジョウカ。

あれは、私の単純さを笑っているに違いない。

「あいよ」

渡された串団子は、間違いなく竹屋のものだった。普段はだらだらしているくせに、用意周到なことだ。…まあ、モノにつられる私が言えた事ではない。

妬ましいと串団子を睨みつけながら、一口。

先ほど感じていた感情はどこかへ行ってしまった。…ホント、単純だ。

結局の所、あの腕の包帯はトオノマワリから回ってきた仕事の時に負った傷だと、ジョウカは話した。

トオノマワリとジョウカは、血縁関係は全くないが、書類上ではトオノマワリがジョウカの保護者という事になっているらしい。

高校を中退したジョウカは職に就かず、ゴロゴロと過ごしていた。あまりにも社会的に体裁が悪い、それを見たトオノマワリは保護者という立場を使い、自分の仕事を回している。本人は、なんで俺が？な感じで嫌々といった所で。しかし、それでも辞める事が出来ないように。

NOと言えない日本人らしく、サラリーしますか、との事。：私から言わせれば、首輪に繋がった犬にしか見えない。

久しぶりにお風呂を満喫した。体調を崩している時は、ジョウカに止められ、入ることが出来なかったが、治ったなら自重する必要がある。

「おまえ、本当に外人？日本混ぜてね？」

そんな事を言われても、一切日本人の血は入っていない。

「混ざっていません。その事に関してはトオノマワリが調べて、あなたも知っている事では？」

「ああ、あれね。いや、あの時は、マワリさんのふざけた情報収集力の方が印象強くて忘れてた。」

：確かに、あれは酷かった。日本には個人情報保護する習慣は無いかと、さえ、思ってしまった。

「まあ、日本人じゃない事は分かっているんだけど、おまえのその趣向を考えると言いたくなる。切実に」

「？私、何かおかしいのですか？」

言葉の方は怪しいが、特に変な行動はしていないはず。たぶん。

頭を捻りながら何やら考え中名ジョウカ。と、なにか閃いたようで、

「……………ハ！前世あたり日本人だったのではないのか汝？」

：いきなり、何を言い出すかと思えば、しょうもない事を言う。そんなわかりもしない、現実味のない事を言われても困る。

「…仮にそうだとしても、私は私です。過去の事に影響されて私という人間が生まれたなんて、他人の体みたいで嫌です。そもそも、

そんなこと認めません」

「うわ、なに全否定してんの。ありえない話じゃないだろ？」

ありえない話って……。それでは、いくら正しく立派な人物だとしても、それは過去の自身の影響があつてそうなったワケで、自分自身ではないと言えないだろうか。極論ではあるが、私にはそう思ってしまう。どんなに無様で間違いだらけな人生だったとしても、前世なんてモノに影響されず、その過ちを正してくこそが人間の取るべき道だと考えている。

：けど、皆が皆そう考えているとは思っていないし、そうではないと理解している。今の自分にしたって、誇れるような事をしているワケでもないし、偉そうなことは言えない。そうやっていける明確なビジョンは、もう、ない。

だから。さっき言ったことは私に残った最後の意地だ。

「……まあ、人それぞれって事なんだろうな」

こちらの考えは見据えたように曖昧な答えで纏めると、ジョウカはため息に似た息を吐き出す。

それは、呆れから来るものなのか、表情は読み取れない。ただ、言葉にほんの少しの温もりを感じた。

…なんだろう。今日はやられっぱなしだ。

わかっているが、今のままでは、反撃のチャンスはない。でも、それはなんとなく癪に障るので少し反撃しようと思う。

ジョウカは、それを言われると起こりはしないが黙ってしまう、という泣き所がある。それは、今の私としての本心でもあるのだが、ジョウカは聞き入れてくれないだろう。

「そうですね。同じ人間なんていませんからね。ですから、ジョウカ」

目線だけをこちらに向けるジョウカに、目を合わせて話す。

「自分を御自愛ください。同じ人間や、ましてや変わりなんていない、上池ジョウカ。あなたは、私にとって、大切な友人なのですから」

「……………あー、まあ、善処する」

目に見えて嫌な顔をするジョウカ。そして、逃げるように、マワリさんの所行ってくる、と言って部屋を出て行った。

今日もマワリさんの家へ向かった。ここ数日は毎日通っていたが、今回はマワリさんからの呼び出しだ。

◇

おそらく、どんな顛末を迎えたのか、その後どのような処置になるのか。その説明会だろう。正直、後の事など興味が持てそうになかったが、やるなら最後までが信条なマワリさんだし。なにより、約束した以上、ここは大人しく顔を出す。

「まあ、そんな訳で、今話したのが今回の errors。……毎度思うけど、これって意味あるんですか？」

さっきから一方的に話している。マワリさんの用件は、やはり、昨日の経緯について説明を要求だった。噂を流す犯人、その元凶、事細かく説明している。

マワリさんはそれを黙って聞いているだけだが、目は、全て話せ、
と言っているようなので丁寧に喋る。まあ、目だけであちらの意志
が分かる辺り、十年間、マワリさんから受けた調教の賜物と言えよ。
う。

「いえ、素晴らしく、充実したお話でしたよ。やはり、きみに語ら
せたら右に出る者はいない位に」

「だから、その言い方やめてください。マワリさんに褒められると
か、寒気以外感じないです。…つか、褒められてる気が全然しね
えです」

「おやおや、偽りもなく本心で話したというのに。……まあいいで
しょう。ただ、きみの説明を聞くと、今泉佳昌いまい かしやうがどんなer r
orだったのかはわかりましたが、どれだけ干渉出来るのか、生き
物以外にも干渉は出来たのか分かりませんね。ああ、後ついでに今
回も、最後までやらなかった理由もね」

いつもと違い、真顔で訪ねてくる。——厭な質問だ。あれは、確
実に楽しんでやがる。

「理由って、他人の人生を勝手に終わらせるのはどうかと思いま
すよ。いくら、残虐で非道であっても、それが自業自得であっても、
他人の生き死に関与していい事じゃないと思いますよ。」

「ほう、あそこまでやっておいて、よくそんな事を考えましたね。……さすがと言いたい所ですが、常夏くん。きみが異能を使うのには、心と体のバランスが一致しなければいけないはずですが、あの時の身体状態でよく出来ましたね」

実際の所は、ただ気を失っただけなのだが、ここは黙ってることにしよう。あっちは何か勘違いしているようだし。

俺は、五年間を失うことで自身の実感を無くしてしまった。ただ、あの時は間違いなく自身の体だと実感できた。当たり前的事だが、この体は間違いなく俺の体だ。

仮に——仮にだが、この体はあの時の俺を表現するためのアタツチメントだとするなら、また別の話だが——

「しかし、惜しいですね。もう少しでこちら側に来れたというのに、ギリギリで戻ってしまっただけです。まったく、あんなのを助けてしまうなんて、……いっそ、最後まで行けばいいのに」

こちら側とは、何を意味しているのかは分からない。碌な事ではない事は確かだろうが。

「……はあ、放っておいてください。あと、言っておきますけど、人助けなんてやってませんよ。マワリさんにはそう見えても、俺は単に面倒になっただけです。それ以外にあんなの助ける理由はない」

もう関わることをない少女を思い出す。

俺はerrorsに同情したのではない。ただ、あの姿を見て、そうする価値が無くなってしまったと感じただけだ。ゼロか一かの話である。

俺は俺の日常を守るためにerrorsと対峙しただけだ。

普通、人間ってのは変化を嫌う生き物なんだ。変革の先により良い未来があるとしても、今見える不変を取ってしまう。俺は、そのまっとうな人間らしく、それを選んだに過ぎないと思う。

「そうですか。きみは今泉佳昌に情けを感じたのではなく、自分を優先したのですね。いや、よかった。もし、同情なんて感情で殺さなかったのなら常夏くんを嫌っていたところですよ」

それだけでなく、アンタは俺を嫌っているだろうけどな。

「では、その事については以上です。次は彼女についてですが、まず、これに目を通してくれませんか？」

スツと、資料を渡される。見れば、小学生くらいの少女の写真が貼られている履歴書のようなものだった。それには、病魔に侵される前の写真と経歴がつらつらと書かれている。

「それにしても――あの子は、なんでこんな事をしたんでしょうね」

「そりゃあ、声を失った事が原因でしょ」

「?それはおかしいです。彼女は話すことができますよ」

「……………はあ?」

「おやおや、直接会ったきみがそんな――ああ、そうか。常夏くんは根本的な所で勘違いしているんです。確かに病気によって声帯に異常が出ましたけど、声そのものは失っていないですよ」

もう一度、資料に目を通す。……………おかしい。

確かに、影響は出たとは書いているが、声を失ったとは一切明記されていない。

「……どういう事だ、これ？確かにアイツは」

口を動かさず、直接こちらの頭に話しかけてきた。

「おや？興味なかったはずでは？」

「興味じゃなくて、間違いを探してるだけです」

改めて資料に目を通す。

今泉佳昌^{いまい かしやう}は去年まで歌手として活動していた。期待の新人、だったのだろう。全国で営業に回りながら、歌のレッスンをこなす日々。しかし、いや、だからこそ、このような結果を招いたのかもしれない。

多忙な日々を送る毎日の中、ある日、高い熱と節々の関節の痛みを訴えた。その頃は単なる風邪か何かと思われ、何日か休養をして、その時は体調も回復したため、誰も気にもしなかった。だが、それから何度か同じような症状を訴えては休み、何日か経てば治るを繰り返し続けた。周りの人たちもさすがに何かあるのではと考え、病院へ行くことを進め、少女もそれに従い病院で検査を行った。結果、慢性扁桃炎が原因で体中に弊害が出ていると判明した。

治療法は、薬物によって症状を和らげるか、手術による扁桃の一部摘出だと、彼女にとってあまりにも酷な事が医師から告げられる。

「彼女のかかった扁桃炎、正確に言えば扁桃病巣感染症は小児期に多くみられ、女性が起こしやすいと言われています。彼女の場合、扁桃を摘出することで完治できたのですが」

言うまでもない。歌手である少女がそんな事を認めるはずがない。認めることは歌手としての生命線を立つのと同義。

「薬物投与による改善を希望したようでしてね。いえ———そもそも、薬とは治すことが目的ではなく、和らげる事が本来正しい」

完治は不可能。それでも彼女は薬による完治を望んだ。医師達や周りの人間からも説得されたことだろう。

———絶望的だ。可能性はゼロに等しい。奇跡を待つものだ

『———それでも、希望はある。ゼロじゃない。奇跡は起こる』

諦めることが出来ず、必死にもがいていく少女。まだ、小さく弱々しく見える命。^{おもひ}ただ、あの病室で歌っていた後姿は未だ輝いていた。

「それを理解してなお、手術だけは拒み続けた。——結果だけ言
ってしまえば、その後、行われた薬物治療はほとんど効果はなかつ
た。炎症を起こしていた扁桃は腫れ上がり、呼吸困難まではいかな
かったようですが、声を出すことは多少の影響は出たようです」

「——あ。もしかして、今泉佳昌が喋らなかったのは」

マワリさんは語る。人には一人一人、他人には分からない感覚を持
っているものだ。少女にとって、いくら、声が出せたところで昔
のような歌声を歌い続けれることが出来なくなってしまうえば、意味
はない。それが、他人からしてみれば些細な変化でもあっても。

だから errorsなんてモノになった。幼いながらも歌手として
のプロ意識があった今泉佳昌にとって今までのように声が出ないな
んて失ったも同じ。

「そのまさかです。常夏くん。扁桃炎が原因で声が出さなくなった
今泉さんは、ひたすら治ることを信じて治療を続けなければならな
かった。手術でしか治る見込みがない扁桃炎患者。歌手である今泉
さんにとってこの上ない地獄。その果てにあのような妖怪にとりつ
かれた」

やまびこ
山彦。

あの少女にとりついた妖怪、精霊でもある山の神。また、樹木の霊『木霊』^{こたま}とも呼ぶ。

一般的には山や谷の斜面に音を発した時、それが反響して送れて返ってくる現象を山彦と呼ぶ。

伝承によれば、山中に住む呼子^{よぶこ}という者が、山彦の声を発すると考えられ、昼夜問わず深山で突然恐ろしい声が聞こえる怪異を山彦と呼ばれた。ほかに？（やまこ）と呼ばれる妖怪と同一視されることもあり、木の霊が山彦を起こすと考えられたことから、中国に伝わる木の中に住んでいる精霊の彭侯^{ほうこう}とも同一視された。

ただ、これだけ各地に様々な伝承として残っているが、根本的な部分ではほとんど同じ。それは―――なにかを反響し“伝える”ことだ。

「歌手とは歌を通して自身の気持ちを伝えられるのら、この能力を使えば、声を出す必要もなく歌を伝えることができる。そうして、彼女の歌は噂となって流された。彼女にとってこの上の無い幸福だったでしょう。しかし、その頃には彼女の体は完全に病魔に蝕まれていた。腎不全を起こしていたのです、それも末期段階の。長い闘病生活と大量の薬物摂取によって彼女の体力は限界で移植手術も行えず、透析によってなんとか延命していた。それでも、彼女には希望があった。街に流した歌を誰かが聞いてくれると」

ただ死ぬのではなく、歌手として死にたかった。今泉佳昌という歌手がいたと証明したかった。歌を聴いて自分に会いに来てほしかった。

た。

しかし、その思いが届くことはなかった。誰も会いに来てくれなかった。時間の無い少女は焦ったことだろう。明日には死んでしまうかもしれない自分。その死の恐怖の果て、狂った妄想にとりつかれた。つまり――みんな同じになってしまえば思いはみんな一緒になる。

もう、歌なんて関係ない。むしろ、どんな形でもいいから思いを通じ合えれば、今泉佳昌にとって救われる最後の希望。だが、同じ境遇がそうそういるワケでもない。少なくとも、あの病院にはそんな人間は存在しなかった。

だから――探すのではなく、全く知らない他人を自分と同じにして、同じ人間同士で救いを求めたかったのだろう。

「了解。納得いきました。けどまあ、それって自分のせいですよね。だって、生き方さえ変えてしまえば済む話なんだから」



資料を返すと、なぜかため息をつくマワリさん。なにやら呆れた感じである。何に対してそう感じているのかは知らんが、目の前でそんな事をされてはこちらもいい気分ではない。

「わかりました。疑問に思っていたところが明確になったので私からは特にありませんけど、後、なにかありますか？無いなら帰ってもらえると助かります」

「え、もう？来たばかりじゃないですか。もう少しマズイ珈琲を啜っていたのに」

「……珍しく気持ちの悪いことを言ってくれますね。もう用済みなんで、黙って帰ってください」

…なんだか今日はやけに余裕というかいつもの調子ではないマワリさん。あまりにも珍しいので余計にも絡んでみたいと思うが、後が怖そうなので今回は退散した方が吉。

「わかりました。でも、そっちも珍しくかまってオーラ出てませんね。これから何か用事でもあるんですか？」

「…何もないです。しいて理由を述べるのなら、今日はもう常夏く

んの顔を見たくないだけです」

「……………」

…機嫌が悪いのはどうやら俺が関係しているようだ。何かしたっけ？

「気づいていないのならそれでいいです。きみにそれ以上を求めるのは馬鹿がすることだと実感してますから…。ああ、勘違いしないでください。常夏くん。きみはそのままでもいい」

…：むむむ。本気でわからない。呆れられていることもそうだが、マワリさんが不機嫌になる理由もさっぱり見当がつかない。

「別に馬鹿にしているワケでもない。ただ——きみは変わらない方がいい、と言いたいのです」

…：つまるところ、無駄な努力などせず、今まで通り良いように使われているって言いたいのだろう。…言いたいことはあるが、首輪に繋がれている事は確かなため反論できない。

「了解。んじゃあ、またなにかあったら来ます」

「はい。それではまた」

パイプ椅子から立ち上がり、振り返ることなく中庭から立ち去る。

楽園から抜け出す。

形態の液晶に目を向ける。時刻は午前十時を過ぎたところ。

昼まで二時間ある。

——さて。時間を弄ぶのもなんだし、なにかして時間を潰そう。
本当は暇な時間は歓迎すべき体質の俺だが、今はそんな時間はいらない。半端な人間には正直やってらんない。

自宅を目指しながら携帯を取り出し、まだ寝ているだろう友人を呼び出す。

「あー、もしもし？ 起きてくるか？ そうか、なら暇だからカラオケ行こう。………はあ？ 行ったことない？ 知らない？ ……なるほど、ならばおまえにまだ知らない日本の文化があることを教えてやろう」

気分は悪いが、よく考えてみればこういうのも悪くないと思う。

／＼二〇〇七年 十月

(6. 5)



上池常夏はそう言って病室を後にする。彼が去った事から気が緩んだのか、背後で倒れている少女が起きたことに一瞬、遅れて気がつく。

ほんの一瞬の油断。油断していた。あれだけやられてまともに動けるはずがない。些細な気まぐれのようなもの。

急いで体の正面を少女に向ける。ほどなくしてカシヤーンと金属音が床から響く。

病室に周りに真新しくついていた血痕を上乗せするように赤から朱へ。

——やられた。

普段ではありえないような油断。自身がerror相手に絶対にしてはならないはずの行為。当たり前で一番に重要な事。

「——チツ。油断した私が悪いのですが、あなたは、あなたで潔すぎますよ」

物凄い勢いで流れる血液。

「まったく性急なことだ。そう長くないからといって今死んでもらっては困る」

結果は決まっているから、今出しても問題ないと見たか。実にその通りだが、しかし、それではここに來た意味がない。素直に話してくれるとは思っていなかったが、これでは後味悪い。

「まあ、いいです。…だが、せめて質問くらいは答えてください」

視線の先の少女はなぜか今にも倒れそうなほど不安定。明瞭だ。少女の細い腕からは真っ赤な血が流れているのだから。

「なぜ——いまさら自殺なんてしようと思ったのです?」

ついさっきまで床に落ちていた果物ナイフで自らの腕を搔っ捌いていた。

少女は虚ろな目でこちらを見るだけで質問には答えない。――まあ、今さら自殺を図るのだ。理由なんてもうないのかもしれない。

「…そうか。そうですね、そこまで考えれるような状態ではないですね。ご苦労さま、もういいですよ。後の事は私がちゃんとやっておきますから――ああ、すっかり、あなたという人間がいたと記録には残りますから」

安心して少女に語りかけると、満足したように床へ崩れていった。

そうして、眠るように倒れた少女の顔は資料で見た一年前の顔そのものだった。

「…なんとも。最後の最後に人間らしくなったところで意味なんてありそうもないのに」

だが、もう彼女にとってその意味はどうでもいいのかもしれない。

だって、それよりも、失ったモノへの価値を見出せたのだから。

これは、正月過ぎのこと。ようやく停学期間が終わったころ、このままドロップアウトしようかと悩んでいる時のことだ。

俺は時間つぶしと自分の習性のため、ビル街にある公園へお邪魔していた。お月様がよく見える夜の七時。

まあ、ほんととはね。駅前にいる女の子でも引っかけて、アバンチュールな一夜を過ごそうとしたのですけどね。見事に玉砕、というより粉砕な訳ですよ、おもに心が。：慣れないことはやるものではないな。そんな状態だ。さっさと帰って寝てしまおうと思ったのだが、考え事をしていたせいか。公園に足を運んでいた。

もともと、十字交差点があつた場所に作られた大暮市内にあるちよつと変わった公園である。

その中心にあるベンチには草臥れたスーツ姿の中年。

ふと、思い出す。

去年の終わり頃、この公園で事件があった。通報を受けたのは最寄りの交番にいる新人のお巡りさん。時間は十時過ぎ。

「今からちょっと、じゃれ合うから街中の公園に人を近づけないでほしい。後、片づけもお願い」

悪戯にしか思えない冗談だ。そう思ったお巡りさんは見回りついでに公園に向かった。結果、消息不明。次の日、同僚を探しに行ったお巡りさんの報告により事件として報じられることになった。

「待ち人がいるのだ」

その人は、ぼんやりと座り込んでいる。俺は、日常的に他人（その人）に声を掛けた。知らない人には声をかけてはいけない。そんな小学生でも知っている事を俺は日常的に行っている。話せば面白そうなワケでもなく、しないといけないと訳でもない。けど、止められない。……いや、辞めれない、という方が正しい。

その行為によって色々厄介ごとに巻き込まれたことも一度や二度ではすまない。最近では、命の危険さえ感じてしまうほどで、治そうと努力をしている。

けど、習慣というのは恐ろしいもので。――例えるなら家に帰ってきて暗いために明かりのスイッチを探すあれだ。誰しもが行う生活する行動の中の一部。つまり、スイッチを探して押すのも、いましていることも自身にとって何ら変わりもしない日常的な（の）ことだと感じてしまっている。

そんな訳で気づけばこうして声を掛けてしまった。

「いつ来るの？」

いつだろう？と、逆に笑いながら質問を質問で返してくる。……まあ、こんな所に座っているような奴に普通の会話を求めるだけ無駄だな。そもそも、俺はこの会話に何を求めている。

男の話から察するに、その待ち人とやらと待ち合わせの約束をしていなかったようだ。……いや、これでは本末転倒ではないか。本来、過程（約束）があるから結果（待ち人）が来るものであって、決して結果だけが来るようには出来ていない。あるはずの無い商品を「買いましたよ」、と言っているようなものだ。

でも、この男は

「それって約束できるものなのかなあ？」

なんて言い出しやがる。

夜の公園でいかにもって奴に声を掛ける自分もだけど、こいつも相
当なものだと思う。……どうしよう。自分はそこまで話が上手い方
ではなく、どちらか、というより完全に口下手である。よく、黙っ
ても話してもダメだね、って言われるほどだ。……あれ？おかしい
ぞ。……まあ、どっちにしてもダメな訳で。こんな変な男と話をした
いなどでは断じて違う。

ふと、背広男が声を上げる。

「お疲れ様、ようやく来てくれたね」

ちょうど、俺の背後。背広男はそこに視線を向け、そう言葉を投げ
かける。

「――」

意識が、凍った。

振り返れば、この場にはあまりにも似合わない女が立っていたのだ

／二〇〇六年 一月末

どうしようもなく曖昧で、とても鮮明な夢。今にも記憶から消えてしまいうようなのに、脳に焼きつくような映像。

ハッキリした知性^{じぶん}と虚ろな意識。晴れ晴れとした精神。それとは関係なく気怠いと感じる身体。何とも言えないこの中途半端な有り方。
………実に、

「……俺らしい……」

目覚めた瞬間、虚ろな意識はどうしようもなく俺自身なのだと、呆気なく証明された。

ベッドから起き上がり、ため息を一つ。気分晴れやかとは言えない。理由はさっき見た夢のせいであるのは間違いないのだが、いかんせん。悪い夢とは思えないし、いい夢とも断言できないのだ。

「…深く考えても仕方がないか。どうせ、夢なんだし」

シンと冷える空気を吸い、気分を切り替える。意識がはっきりしたところでベッドから立ち上がり部屋を出る。

部屋を出ると下の階から朝餉の匂いと器を並べる音が聞こえる。おそらく、後は盛り付けるだけで完了する段階だろう。

「…まいったなあ、昨日手伝うって約束してたのに」

午前七時前。

今から朝食の手伝いなんて、やれることは少ない。…仕方がないのでとりあえず顔を洗っていつも通り謝るしかないだろう。

トントン。リズムよく出来るだけ自然に音を小さくして階段を下りる。無駄な抵抗ではあるが、体が勝手にそう動いてしまうが、本当に無駄な抵抗であった。

「くおら——っ！寝坊とはいいい度胸じゃない、アンタはっっ」

一階に降りた瞬間、台所のドアを破壊せんばかりの破壊音と怒声が

飛ぶ。

「昨日、あれだけのタンカきっておいて、毎度の如くこうも簡単に破るとはっ！我が弟ながら許せん！！」

と、片手には包丁を持ちながら此方に近づいてくる。…シャレにならん。

「ちょ……！待てって姉ちゃん！謝るから落ち着けっ！」

「待て、と言われて待つ人間がいますか——っ！！」

問答無用な我が姉。

このままでは、片方が刑務所行きで、もう片方がベッド行きなワケだが。それはつまり、お互い当分はシャバの空気を味わえなくなるという事であって、つまり——非常にまずいです。

「いいから落ち着けっ！そして、よく見ろ！お前が持つてるブツは人に向けていい物ではない！」

姉は何を言っているのか分からないように首を傾げる。刃渡り二十センチの包丁。何時だったか通販でまな板も切れてしまうほどの切れ味というキャッチフレーズに惹かれた姉が衝動的に買ってしまっ

た代物。あんなもので切られたらマグロの解体ショーならぬ、人体解体ショーになってしまう。

気づかぬ姉にその包丁を持つ右手を指さす。それでも気づかぬ姉は自身の手に視線を向けて、そこで握られているモノによく気が付き、驚く。

「…え？ やだ、やだ、私いつの間にこんなモノ持ってたの!？」

信じられないー、と慌て騒ぐ姉。それでもバリバリの警部補。押しも押されぬ期待の新人。出世街道まっしぐらなキャリアウーマンで、来年には警部へ昇進するらしい。…というか、そんな正義の人間が無自覚で人を殺そうとしたのか。

この家には姉と弟である俺の二人だけが住んでいる。いや、二人とになっているが、姉は休みの時にしか帰ってこないから、実際には俺一人だけでもある。

両親の方は、一年前にぽっくり逝ってしまい、残った俺たちはこんな感じで生活している。苦労もそれなりに、行き詰る事はなかったが、今まで通りの生活とまでは行かないものの、そこまで大きな変化のない生活を送れていた。理由としては、姉がその頃には仕事に就いていたのだ。

しかし、いくらキャリアとして警察になったからと言って、若いうえに女の身で俺という足手まといがいる状況で普通に生活なんて出来るはずがない。最初は高校を辞めて働かないといけないなと思っていたのだが、そんな俺の考えを見透かしてか『弟の一人や二人どうという事はない』と言い放ち、今のよう形になっている。

…姉ちゃんは知らないだろうけど、俺はすごくそれがイヤで仕方がない。わがままでしかないのだろうけど。

I 県の沿岸最北の県境付近。

栄えているとは言えず、それでも田舎とは言えないような半端に便利な何かと不便な町である大暮という市がある。人口は約四万人。いくつかの観光名所があるが、いまいちパツとしない。駅から五キロも離れれば山や畑が広がる典型的な地方都市だ。

その駅を西から三キロも離れた所に小暮という場所がある。これといって特徴はない静かな住宅街。土地は余っているのだが、もともと田畑が広がっていた土地だった為、今でも半分近くは田畑が広がり、見た目ほど住宅街とも言えない。

しかも、建っている家は古く、築十年以上なんて当たり前な感じで、はつきり言って華がない。周りが山に囲まれているせいで季節によ

っては濃霧が発生する事もあって住みやすいとは言えない。

そんな小暮の中心、他の家より新しめな家が並ぶ番地がある。ただ、新しいとは言っても他と比べてであり、特に珍しくもない基本的な二階建ての家。

それが俺、彼野比奈^{かれのひな}の住む、一キロ圏内にコンビニも自販機さえない閑静な住宅街だ。

今日はなんていうか俺にとっていい天気だ。太陽が雲に隠れて、濁った明るさの辺りが特に。

「ほーらー。そろそろ出ないと遅刻だぞー」

「わかってるよ、姉ちゃん。…つか、そっちも出ないとまずいんじゃないのかー？」

学校へ行く準備を整え、玄関へ向かう。

そんな動作も慣れたもので、弁当以外入っていないカバンの中をサラッと確認して、うん、いつも通り。

「大丈夫、大丈夫。いざとなったら、高速に乗っていけば済むことだし」

家ではナチュラル過ぎて、相変わらずのダメっぷりを発揮している正義の人であるマイシスター。その周りには昨夜から飲んだ缶ビールがピラミッドになっている事を気にせず、テレビを見ながら此方に手を振る。

とりあえず、帰ったら部屋の掃除だ。憂鬱だなあ。

元氣よく玄関を出ることは出来なかった。早すぎたワケではないが、いつもより余裕を持てる七時四十分頃。三年間通い慣れた道を欠伸をしながら歩いていく。

今日の天気は本当にハナマルをあげたくなるほどよろしい。殺風景が広がり、日の光が少ない灰色の世界の感じが、俺をとても優しく包んでくれる気がする。

街中。駅前近くを通ると、俄かに騒々しかった。

あれから、もう一週間が経つ。

俺はあの日、公園のベンチに座る背広男に声をかけた。そして、奇

妙で不可解な体験、もしくは有りえない光景を見たのだ。

十八年間、生きてきて両親が死んだ時以上の衝撃だった感じている。や、両親が死んだ事に対しては酷いほどの衝撃を受けたんですが。

唐突に深呼吸をして、大きくため息を吐いてみる。

無駄に冷えた空気が体を引き締める。よく言えば、気持ちも一緒にキュッと抑える。あえて言うなら、なんか油断したみたいにフワフワした気分が妙に落ち着かなくて仕方がない。頬をこねて無意識に出てしまう感情を抑える。

俺は一週間前から少しずつおかしくなっていて、突発的に奇妙な感覚があふれる。

奇妙といえば、去年高校を辞めた先輩。大暮市にはマジで出ると噂で有名なスポットがあつて、そこにある家の住人である先輩だ。この人は変わっていて、いや、性格とかじゃなくて。その在り方がとても潔いのだ。なんていっても卒業間近で中退したのだから。

その時だったか。

理由を聞いたのだが、その答えが妙にしっくりするもので。ああ、この人はこうなんだ、こうして生きているんだ、なんて在りのままに、自然のままに生きる姿を見て感銘を受けてしまった。

こういう生き方って確か、……あれ？なんだっけ？やべ、ど忘れ
しちゃった。最近、ドキュメント番組でやってたやつなんだけどな
あ。

大暮東高等学校。

駅から北へ二キロほどに向かった先の山の近くにある学校である。山の近くという事もあり、裏手には森が広がっており、もともとは農林高校であった。

しかし、それは四年前の話で、今は市内にあった商業と水産の科目を専攻できる高校と合併し、総合学科という一つの学校に多くの科目がある形になっている。合併当初は新しくなった校舎や新しく導入されるカリキュラムや制服がかわいいといった辺りが注目の的になっていた。倍率も最初の頃はこの地方都市では珍しく三倍近くあったこともある。

でも、それは出来て二年間の間だけで、その次の年には定員ギリギリかちよつと多い位の数値になった。理由は詰め込み作業のような授業になってしまいうからである。

この高校は入学した同時にそれぞれ選んだコースに分かれるのではなく、最初の一年は皆同じようにそれぞれの系列を体験しながら、普通の授業を受ける。その後、七つある科目の中から学びたいコースを選んでいく仕組みなのだが、何ともお粗末なもので。結局、他

の専門的な高校より一年間遅れて学ぶ事となり、結果、時間が他より少ないために急ぎ足な授業で薄いというか濃い授業とは言えない内容となった。

：まあ、そんな事は学校の説明会や資料をよく読めばすぐに分かった事だが、皆、そんな事よりも新設された高校とか制服の方へ目が行き、分かっていたが深くは考えなかった。

「ま、オレもその中の一人なんだけどね」

下駄箱から上履きを取り出しながら一人呟く。

自分以外誰も居ないせいか、辺りにそんな独り言が響いた。本来ならば登校してくる生徒達で賑わうはずのこの正面玄関。しかし、今現在進行形で一人として登校者はいない。や、別に今日は祝日で間違っただけとか、先生に呼び出しを食らったみたいなバカな話ではない。単に遅刻しただけだ。……確信犯的に。あえて言うなら、俺のクラスは今体育の授業で教室に居ないところがキモ。

我が校は北側に五階建ての校舎と南側に三階建ての校舎の二つの建物でなっている。

基本的には五階建ての方が生徒達の教室と職員室など普通の学校と変わらない教室がほとんどで、三階建ての方に専門的な教室や文化

系の部室とその他倉庫の教室でなっている、といった具合にわかりやすく区切られている。

もつとわかりやすく言えば、北側は新築、南は寂れた校舎。いや、見た目じゃなくて中身が。

というものの、三階建ての校舎が合併以前からある校舎で新しい方は新たに建てられた校舎なのだ。結局、合併するにあたって専門的な実習室が増やさなければならなくなった。そこで目を付けられたのが旧校舎だ。それにより今のような構造になった。

しかし、新たに必要になった実習室などはしっかりとした新品のような教室になっているのだが、それ以外のそのまま使用されている教室、特に改装した教室が隣にあるところは明らかに壁とかの色が違って酷いモノだ。

その点、北側の新校舎は中も真新しい。壁やドア、トイレにしても今風なデザインや機能性になっている。机や椅子もすべて新調されたものになり、あまつさえ、バリアフリーという名目でエレベーターやスロープさえある。

……こっちに金使いすぎて、あっちは手抜きになったのではないだろうか。

ガラツと音を立てて教室に入る。わかっていたが誰も居ない教室はそれはそれで寂しいもので。自分の机にかばんを置き、そのまま教室を出る。

「…さて。どうしようか」

このまま教室に居ても、クラスメイトが帰って来るにはまだ時間がある。

時刻は十二時手前。昼の休憩まで、あと、三十分近く時間を持て余す。今の内に飲み物でも買ってきたほうがいいのだが――

「……？」

下の階、二階から何やら騒がしい声が聞こえた。感じてきには口論をしているのような騒がしさ。時間を持て余しているオレにとってこの上にない暇つぶしになりそうなニホイがする。

自販機も二階にあることし、丁度いい口実もあるから、ちょっくら様子見に行こう

そう思うと自然に頬が緩んだ。

下の階。

自販機のある休憩所のようなひらけたホールへ続く廊下。昼間だというのに何とも薄暗い。その先から女の声がする。話の内容は分からないが、やはり口論しているようだ。

「…学校の生徒、じゃないか」

本来、今は授業中。俺みたいに遅刻したか、授業を抜け出さなければ、ここに来ることは難しい。

「……教師のほうか？」

と、考えたが泣きながら走り去る女生徒が見えた。思わず近くの壁に隠れる。正直驚いた。急に出てきたことに対してではなく、出てきた生徒に対してだ。あの娘は確かC組の――

「おい、ここで何やってんだ？」

「うん？」

思い出そうとない頭を使っているのに背後から話しかけられた。人が懸命に考えてる時に話しかけるのは良くないなあ。

「今この辺まで出かかっているとこなんだ。話しかけ——って、あれ?……上池、セン、パイ?」

暗い廊下に溶け込むように、なにやら袋を片手に此方を見ている男の姿。年の頃はオレと一つしか変わらないのに髪が白い。その白髪の青年は、気怠そうな顔をしている。

一年ぶりの再会。

欠伸をして眠そうに眼をこする青年。それがもう、誰が見てもやる気のない態度で、どうしよう。すげー。相も変わらず興味が尽きず、尻尾とかあれば、ブンブン振ってしまいそう。

「よっ」

一年も会うことは無かったが、全く変化のない暢気な青年はあの頃を思い出させる。

「これって、不法侵入になりますよね?」

「バレればな」

こちらの想像以上なワケで。忘れかけていた、一年前に聞いたきりの、なんでもない声。

「バレなきゃって。オレがバラすって考えないんですか？」

「あ？バラす気なのか、オマエ」

ふーん、とまじまじ此方を見た後、白髪青年は興味を失ったかのように目を閉じた。視線が怖いですよ、先輩。青年にとってそれが素なんだろうが、ガン飛ばされているようだ。……いや、それはそれで羨ましいんだけどね。オレ、いつもニヤケ面だし。

先輩は、この学校に何か用でもあるのだろうか。この人の事だから、もう一度高校をやり直すなんてことはない。可能性としては学校内の誰かに用があるくらいだろう。……いや、この人は出来るだけ他者と関わらないようにしているから、それも考えづらい。

「あの。学校には何か用で？」

「野暮用。それで、悪いんだが、場所を教えて欲しい。スッポリ忘れちゃってさ。出来れば案内してほしいんだ」

一年の間に中の構造忘れてしまったらしい。……オレも物覚えは悪い方だが、三年近くも通った学校の中を忘れるものなのか。いや、この人なら有りえそうな気がしてきた。

「あれ？玄関の近くに案内板なかったですか？」

「ああ。ここに来る前に見たよ。それで絶賛迷走中だけど」

「……うわあ。それって本当に迷子らしくていいですね」

この学校はちょっと変わっていて地下一階がある。ま、地下と言っても地面の下にあるワケじゃなく、正面玄関ある階層より下にあるからそう呼ばれているだけで、窓もあるし日の光もちゃんと入る。なんとも面倒な構造だが、山の斜面をそのまま使ったせいだろう。

青年はまたもやこちらを直視する。

「あ、いえ、すみません。変なこと言って、その」

彼は目を白黒させてオレを見る。

いいよ、と愉快そうにニヤついた。

「確かにその通りだな。いくら馬鹿でも母校を忘れるなんてあり得ないよな」

何が面白いのか、笑いながら吐き捨てる。

「あの、それでどこの教室に行きたいんですか？」

「ん？料理作る教室なんだけど、あれ？調理室？料理室？」

「調理室です。それなら第二校舎のほうだから渡り廊下を通って一階にありますよ」

また目を白黒させてこちらを見る。……この人、意外とかわいい面があるんだったな。

「いや、ねえ。俺さ、案内してほしいって言ったの聞いてない？」

「その、オレ、今日遅刻して来てまだ担任に報告してなくて、それで校内をうろつくのはちょっとマズイというか…」

白髪青年は似合わないくらいの真面目な顔でこちらを見る。滅多にない、というより初めて見た顔だ。…この人こんな表情が出来るんだ。

「そうか、それなら無理強いは出来ないな」

白髪青年は笑う。生まれつきそうであつたかのような自然さで。

もっと話したくなつたが、チャイムが聞こえた。午前の授業の終わり。

「あの。また会えたりします?」

「いや、学校内ではもうないと思う。アイツにはこんな事ないよう注意するし」

すこし焦る。そろそろ時間だ。

「なら、先輩の家に行くのは大丈夫ですか?」

「はい?」

昔、彼の家に訪問したことがある。灼熱のような夏の季節。昼下がりに上ったあの長い階段。

「俺の家にか?……いいけど、何もねえし、何も出さないぞ」

わかっている、と返すが何やら難しい顔になったと思うと、きしし、と笑う。

「おまえ、昔と少し変わったよな。まあ、どうでもいいけど」

白髪の彼は皮肉げに、そしてドキリとすることを笑って言った。

こうして一年ぶりにオレは上池常夏と再開した。

思えば、オレにとって数多い中でも大切な繋がりだったと思う。

上池先輩と再開する事以外は特に変化もなく一日の学校生活は終わった。

日が沈んで、なんとも気味の悪い時間になった。

ドクン。ドクン。ドクン。

なにか急かされている。この衝動がどこから来るものなのか分からない。

目的がわからない。

初めは何も考えずに。誰かに話しかける事が悪いことなんて思わず。面白そうとか、何かを訪ねたいとか、助けたいとか損得の問題とか、価値とか在り方とか。何らかの意味はなかった。

最初は無償で話しかける人間だった。でも、少しずつ変わっていった。むしろ、何でそんな純粋だったのか、最近はそんな理由を持っていた昔の人間がバカみたいで。

「――って、やばいよな、オレ」

自分らしくない…のは分からないが他人事みたいにツツコンでみる。おかしいのは自分の事だからよくわかっている。この先どうなるのかはわからない。このままでもいいのかなあ、と将来を自分なりに考えてみたが、やっぱりそんな事がわかるはずもなく、いま出来る事しかみいだせなかった。

「ま、そのほうがオレらしいだし」

しょうがないよね。

そうと決まれば、気ままに行動するのがいい。他の人間には趣味とか特技があるんだし、これも趣味の一つだと思う。なら簡単だ。オレも他の人と同じように夢中になれば、自分に負い目を感じることもない。

というワケで、今日も公園に向かってみる。

ドクツ。ドクツ。ドクツ。

リズムよく、跳ねるテンポ。

三拍子とかワルツとか、そんな感じで体の中が躍動する。

ただ歩いているだけなのに、じんわりと体から汗が出る。冬だとい
うのに上着を脱ぎたくなる気分。けど、そうはしない。公園が見え
た。ベタツとしていた感覚が剥がれていく。

季節は冬。

今日もオレはおかしくなっていく。

この公園には最近までは、小さい頃に行った一度だけしか入った事
がない。普通の公園が庭だとするなら、この公園はちょっとした迷
路だと思う。

もともと十字路があった場所に造られたこともあって、公園内の路
は十字路の道幅を狭めただけのアスファルト。公園内の中央に遊具
などがあり、それ以外の場所は原っぱな感じでどこも同じに見える。
十字路に合わせて入り口は東西南北に一カ所ずつの四カ所。その入
り口にしてもどこも同じビルが並び、公園を出てもどこなのか迷う。

一度、造りとか違いを把握しようと散策したが、とても出口にある
看板なしではわからない。もし、これで夜なら看板も見えないから
どこに出るか本当にわからない。

調べたところによると、設計者は有名な人物という事以外は不明。名前も性別も。年齢さえも。

分かっている有名ってのは、なにで有名なのかさっぱりわからない。

そういえば、この公園も有名である。

土地勘のない他県の親子が夜まで遊んでいて、警察に電話をかけて救助してもらったという都市伝説だ。・・・いや、ねえだろ。

担当した警察管は、なにかの間違い電話かいたずら電話だと思い、一時間以上経ってから様子を見て行って本当に助けを求めていると判明したとか。そういう入る時はいいが、出たらここがどこなのか分からなくなる魔境の公園である。

そして、今日もその謎を解明出来ず、この場を後にする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6153x/>

エデンの死角

2011年11月24日13時58分発行